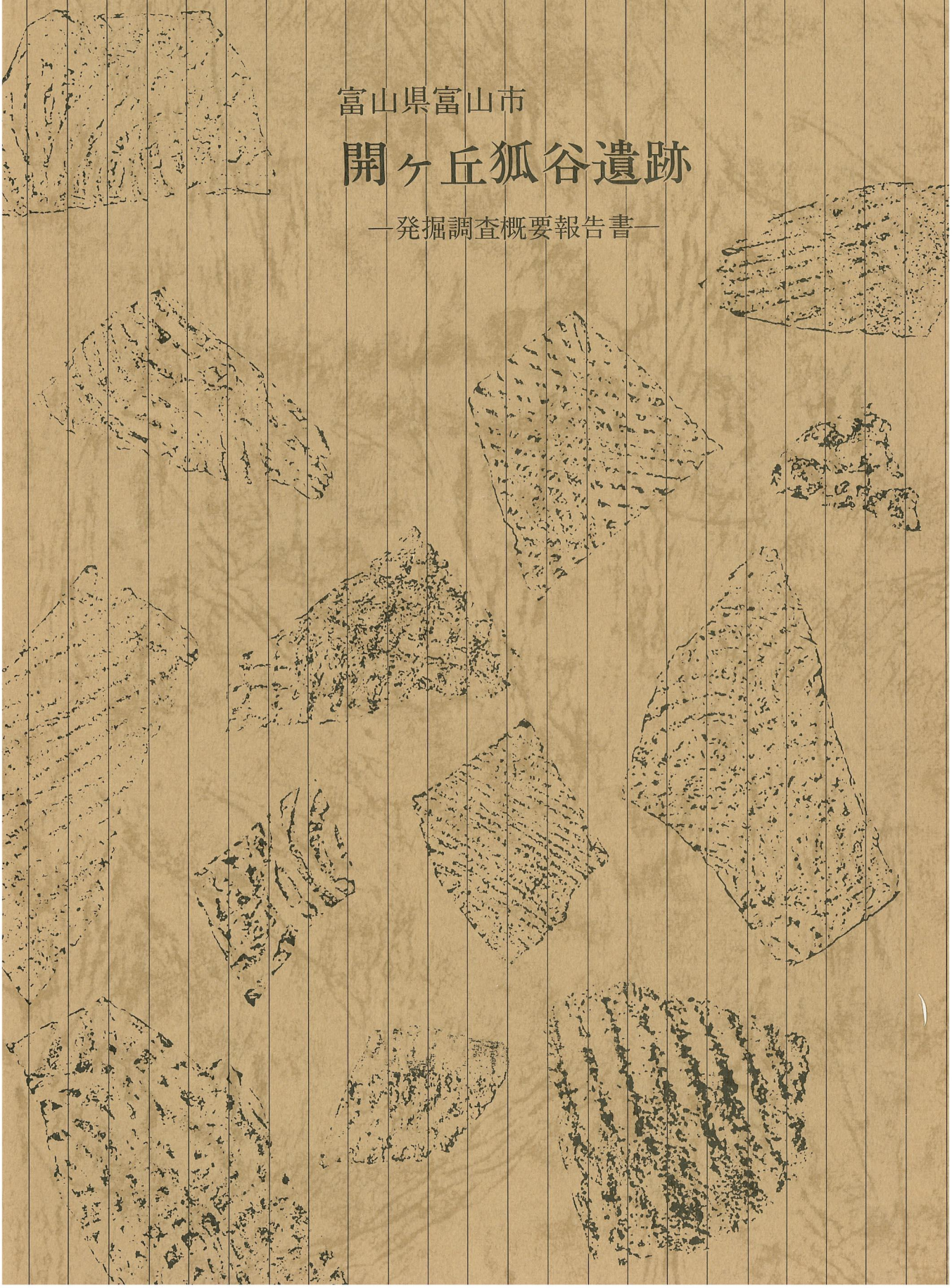
1986.3／富山市教育委員会

富山県富山市

開ヶ丘狐谷遺跡

—発掘調査概要報告書—



富山県富山市

開ヶ丘狐谷遺跡

発掘調査概要

1986年3月

富山市教育委員会

例　　言

1．本書は、昭和60年度に実施した、県営畑地帯総合土地改良事業呉羽射水山ろく東部地区の区画整理工事に伴う富山市開ヶ丘狐谷遺跡発掘調査概要報告書である。

2．調査は、富山県耕地課の委託を受け、富山市教育委員会が行った。
　調査期間は、昭和60年10月１日～昭和61年３月20日である。

3．調査及び遺物の整理にあたり、次の諸機関及び個人の方々の指導・援助を受けた。記して謝意を表したい。
　富山県文化課、富山県埋蔵文化財センター、富山県耕地課、富山市開ヶ丘地区、富山市平岡地区、富山市西押川地区、富山市北押川地区、山田川ダム建設事務所、呉羽射水山ろく用水土地改良区、田上浩幸、宮田進一、山内賢一、西井龍儀（敬称略・順不同）

4．本遺跡出土の須恵器の胎土分析は、奈良教育大学教育学部・三辻利一教授に依頼し、その報告を本書に収録した。

5．本遺跡出土品は、富山市考古資料館において富山市教育委員会が保管している。

6．発掘に伴う出土遺物の註記については、遺跡名を「ＨＫＤ」とし、次に各地区名、遺物番号名の順にした。

7．本遺跡の調査は、富山市考古資料館主任学芸員藤田富士夫、富山市教育委員会社会教育課学芸員古川知明が担当し、本書の執筆は、古川が行った。

Ⅰ　遺跡の位置と環境

1．位置と地形

開ヶ丘狐谷遺跡は、富山市開ヶ丘地内の通称狐谷に所在する。

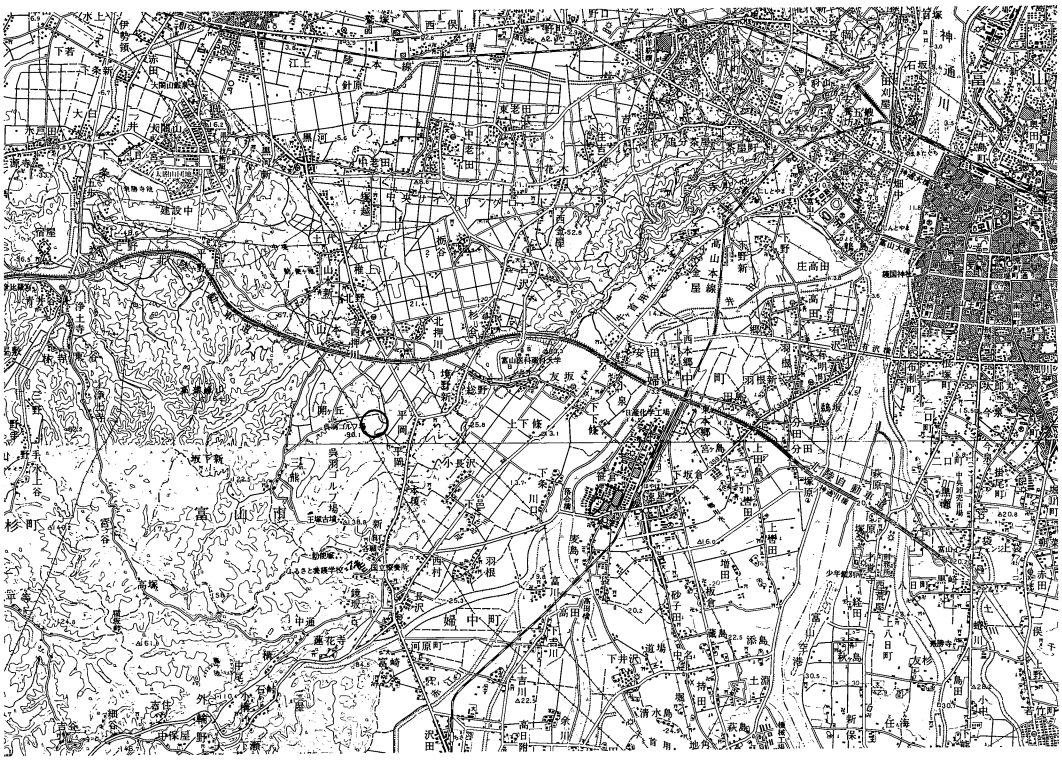
富山県の中央部に位置する富山市は、富山平野の中央をほぼ南北に走る呉羽山丘陵を西に控え、飛騨山地を貫流する神通川と、立山連峰に源を発する常願寺川とによる複合扇状地上に立地する。北は富山湾に面している。

開ヶ丘は富山市の南西端に位置する。周囲は畑地帯となっている。この北方800ｍには北陸自動車道が走り、東方２㎞には富山医科薬科大学がある。

開ヶ丘周辺の地形は、呉羽山丘陵・射水丘陵・境野新扇状地により構成される。

境野新扇状地は、富山市境野新付近を扇頂とし、呉羽山丘陵と射水丘陵との間を北に向かって約60度の角度で開く旧扇状地形である。

射水丘陵の東部地域は、標高約60～70ｍの段丘状の平坦面となっている。その規模は東西750ｍ、南北750ｍを測る。平坦面には北側へ向う開析による舌状地形が幾列も認められる。地形は、中央にある最大の開析谷により東西に大きく二分される。遺跡は平坦面の東端縁辺部に位置し、直下の境野新扇状地面とは約30ｍの比高差がある。



第Ⅰ図　遺跡の位置（１：100,000）

2．周辺の遺跡

呉羽山丘陵西麓から射水丘陵東部地域は、段丘・丘陵など起伏の多い地形のため、地形の好条件を巧みに利用して各時代・各種類の遺跡が営まれた。

この地域は県内においても遺跡の分布密度が最も高いところの一つとして知られ、特に奈良～平安時代に生産遺跡が増加することが特色である。

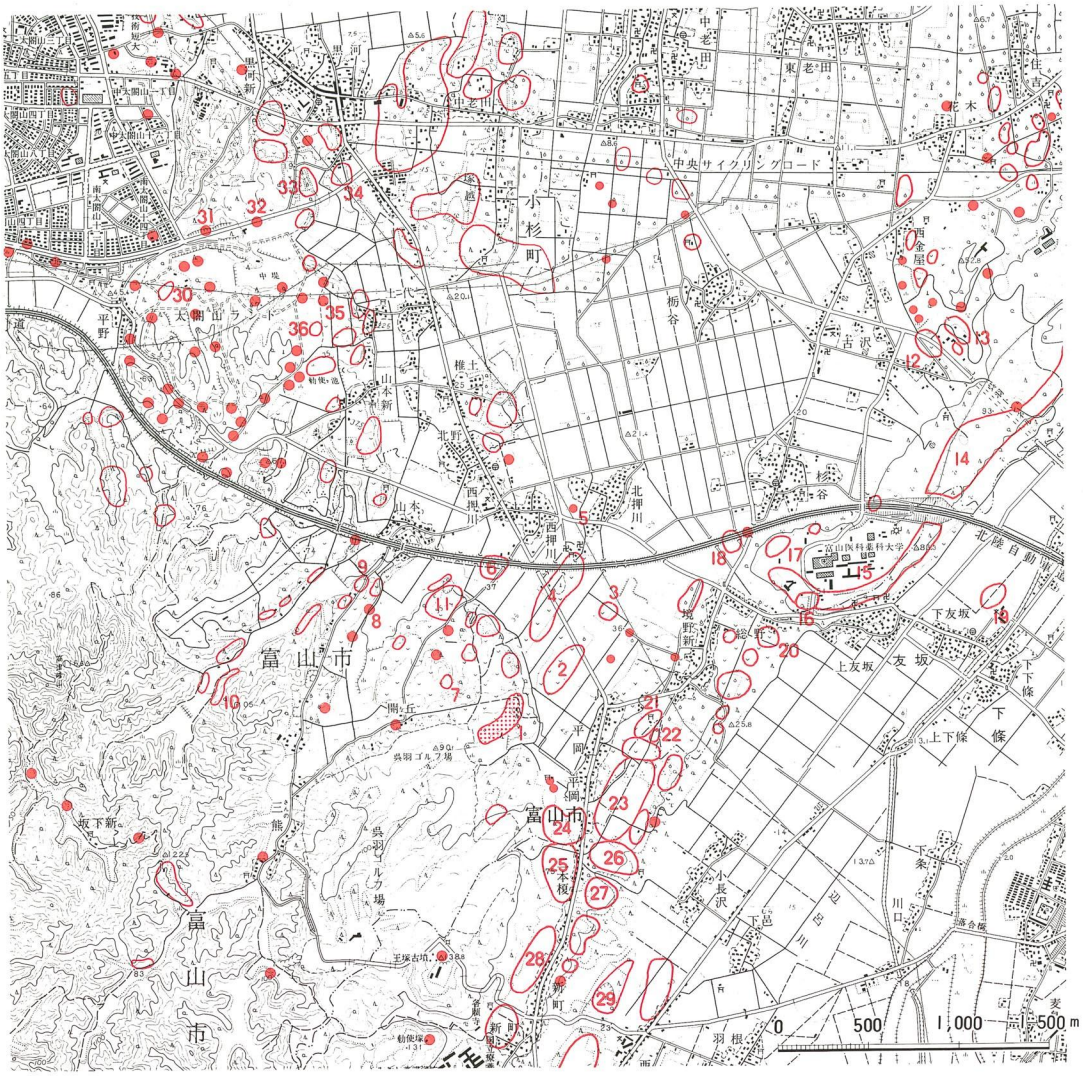
旧石器時代の遺跡は、呉羽山丘陵・射水丘陵・境野新扇状地の各所に分布する。境野新扇状地扇頂付近に立地する境野新遺跡からは東北地方東山系の石刃文化石器群がまとまって出土している。そのほか杉谷Ｆ・Ｈ遺跡、新開遺跡、畑総分布調査№30遺跡などからナイフ形石器、杉谷Ｆ遺跡、平岡遺跡、千坊山遺跡などから尖頭器や有舌尖頭器が採集されているが、単独出土例が多い。この状況は呉羽山丘陵や射水東部丘陵の多くの遺跡に共通した現象である。

縄文時代前～後期には各所に拠点的な集落が形成されるようになる。縄文前期から中期にかけて、境野新扇状地扇頂の羽根丘陵上に平岡遺跡が営まれる。中期になると射水丘陵では畑総分布調査№34遺跡(中期前葉)、畑総№29遺跡(中期中葉)、呉羽山丘陵の杉谷段丘上に杉谷遺跡（中期前葉～後葉の住居跡14棟検出）が形成される。後期には羽根丘陵上に二本榎遺跡が営まれるが、晩期に至ると遺跡数や規模は縮小する。

古墳時代には、呉羽山丘陵南部と羽根丘陵に古墳群が形成される。呉羽山丘陵においては、杉谷４号墳に代表される四隅突出型方墳、前方後方墳、方形墳など出雲文化の影響を受けたと考えられる前期古墳群および杉谷Ａ遺跡の方形周溝墓群からはじまり、中期には古沢塚山古墳など畿内的墓制である前方後円墳が築造されるようになる。境野新遺跡では中期の集落跡が検出されており古墳群形成の背景を示す。この南西３kmの羽根丘陵上には王塚古墳・勅使塚古墳の２基の前方後方墳がある。

歴史時代には射水東部丘陵一帯の谷あいを利用して数多くの窯が築かれる。須恵器窯は７世紀後半の平岡窯跡を初めとし、８世紀代には北押川窯跡、山本藤ノ木窯跡、室住池窯跡のほか、計画事業地区内の分布調査により10基以上の窯跡が確認されている。炭焼窯あるいは製鉄窯もそれ以上の数が存在する。南北に谷が走るところでは谷をはさんで東側の斜面に須恵器窯、西側の斜面に炭焼窯・製鉄窯が作られる傾向にある。

開ヶ丘狐谷遺跡の東側直下の斜面にも須恵器窯が１基存在し、その斜面下には御坊山遺跡（須恵器・土師器・鉄滓を出土）が存在する。この意味で須恵器窯とその操業を行った工人集団の関連の中において開ヶ丘狐谷遺跡は理解されると考えられる。



第２図　周辺の遺跡

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	開ヶ丘狐谷	縄(中)、奈～平	13	古沢 A	旧、縄、奈～平	25	二本榎 I	旧、奈～平
2	御坊山	奈～平	14	呉羽山丘陵古墳群	古墳	26	二本榎	旧
3	北押川 B	奈～平	15	杉谷古墳群	古墳（前）	27	二本榎 II	奈～平
4	北押川・墓ノ段	旧、縄、奈～平	16	杉谷 A	古墳（前）	28	新町 II	縄、奈～平
5	北押川窯跡	奈～平	17	杉谷	旧、縄	29	添山古墳群	古墳
6	上堤池	縄(中)、奈～平	18	境野新	旧、古墳	30	上野赤坂 A	旧、奈～平
7	畑総 No. 30	旧、奈～平	19	友坂	奈～中世	31	高山	旧、奈～平
8	山本藤ノ木窯跡	平	20	総野		32	東山 I	奈～平
9	田尻池 B	旧、縄	21	野下	縄(晩)、奈～平	33	東山 II	奈～平
10	室住池窯跡	奈～平	22	新開	旧、奈～平	34	表野	旧、古墳、奈
11	畑総 No. 34	縄（中）	23	平岡	旧、縄(前・後)	35	石太郎 A	奈～平
12	古沢	旧、縄、奈～平	24	平岡窯跡	白鳳、奈～平	36	石太郎 C	奈～平

3．開ヶ丘のあゆみ

開ヶ丘の成立は江戸時代後期と考えられている。もと村名は開発村といい、三熊村の東、通称茨山を開発してできたことにちなんで開発と称したという。

江戸～明治にかけては、婦負郡長沢郷に含まれた。

現在、開ヶ丘の丘陵周辺の小支谷には、山中奥池・行付池・中山行付池など灌漑用に改修された堤が数多く見られるが、文化年間(1804～1818)には、石坂堤・千袋田堤・室見坂堤が開かれたとある。

この丘陵地帯の北部は、かんしょ・スイカなど商品作物の栽培のため畑地として利用されており、南部は、ゴルフ場敷地として大規模に開発が行われている。

Ⅱ　調査に至る経緯

呉羽山丘陵西麓から射水丘陵東部にかけての一帯は、地形が起伏に富み、また土壌も黒色土や黄色火山灰層が発達しているため、富山市内でも有数の畑作地帯となっている。

昭和57年に、この一帯が県営畑地帯総合土地改良事業呉羽射水山ろく東部地区の事業計画区域になったため、事業主体者である富山県耕地課の依頼により、昭和58年に富山市教育委員会が埋蔵文化財包蔵地の分布調査を行った。

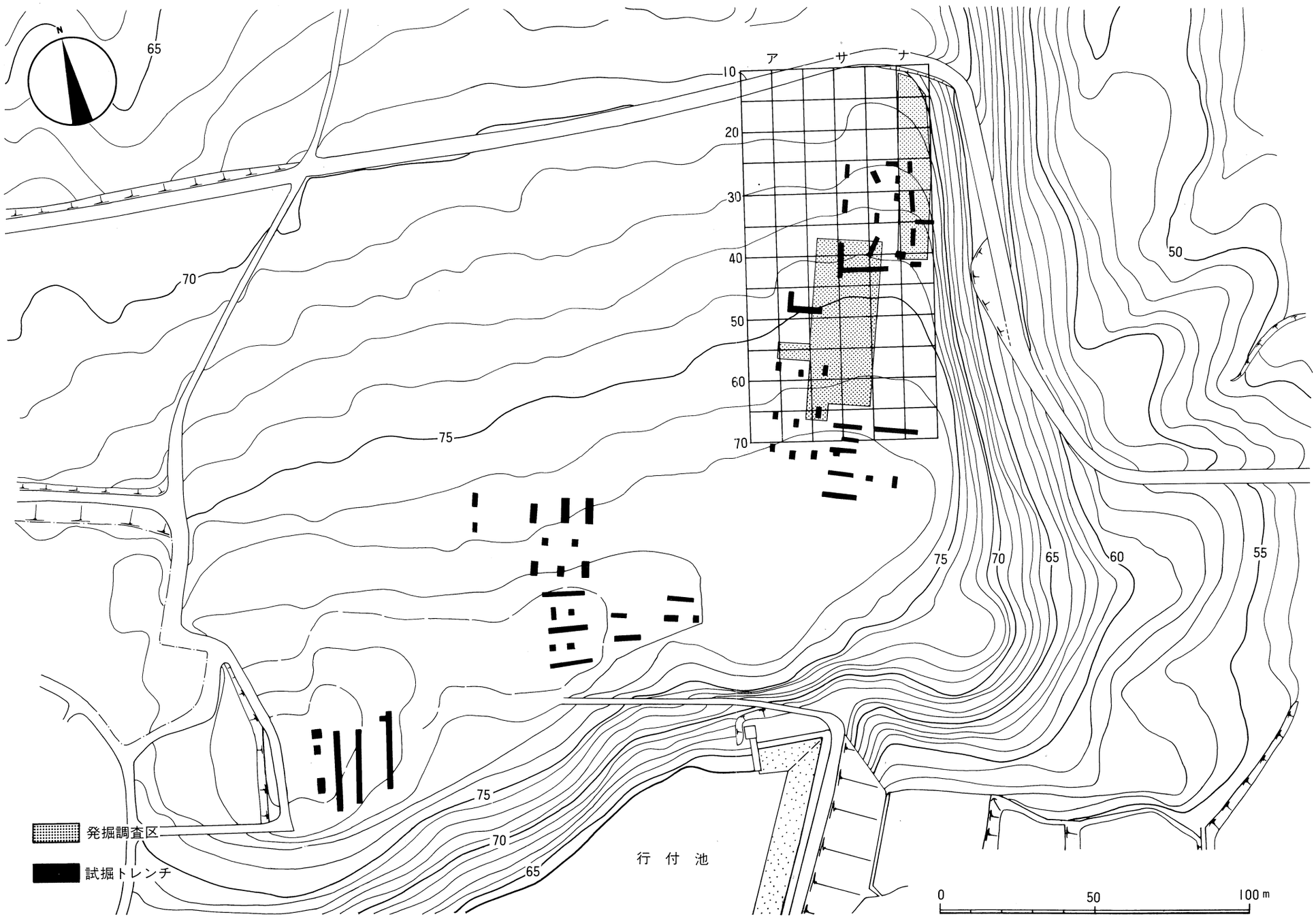
分布調査の結果、事業計画区域内には約130カ所の遺跡が存在することが明らかになった。この中には、富山市教育委員会発行『富山市遺跡地図』に記載のある周知の遺跡８遺跡が含まれている。これらの遺跡は旧石器時代から中・近世にわたるものであるが、特に奈良～平安時代を中心とした須恵器窯、炭焼窯、製鉄遺跡等の生産遺跡が多いことが注目される。

今回調査を行った開ヶ丘狐谷遺跡は、この分布調査によって新しく発見された遺跡である。

遺跡は、昭和61年度県営畑地帯総合土地改良事業の区画整理工事実施区域に含まれることになったため、富山県耕地課、富山県埋蔵文化財センター、富山市教育委員会の三者で遺跡の取り扱いについて協議を行ない、遺跡の範囲・性格等概要を把握する目的で試掘調査を実施することになった。

試掘調査は、富山市教育委員会において実施した。区画整理事業計画地30,550㎡のうち遺物の散布する範囲約27,000㎡を調査対象とし、63カ所のトレンチを設定して500㎡の調査を行った。調査は、昭和60年５月31日から昭和60年６月19日まで延べ15日間を要した。

試掘調査の結果、遺跡は約21,000㎡以上の面積があり、縄文時代及び奈良～平安時代の遺構の存在が確認された。このうち、区画整理工事計画区域に約19,500㎡の遺跡がかかることが明らかになったため、再び三者で遺跡の保存措置について協議を行った。協議は、畑面高の計画変更等により極力保存を考慮する方向で進め、最終的に遺跡の破壊を伴う部分約1,800㎡について事前に記録保存調査を実施することになった。

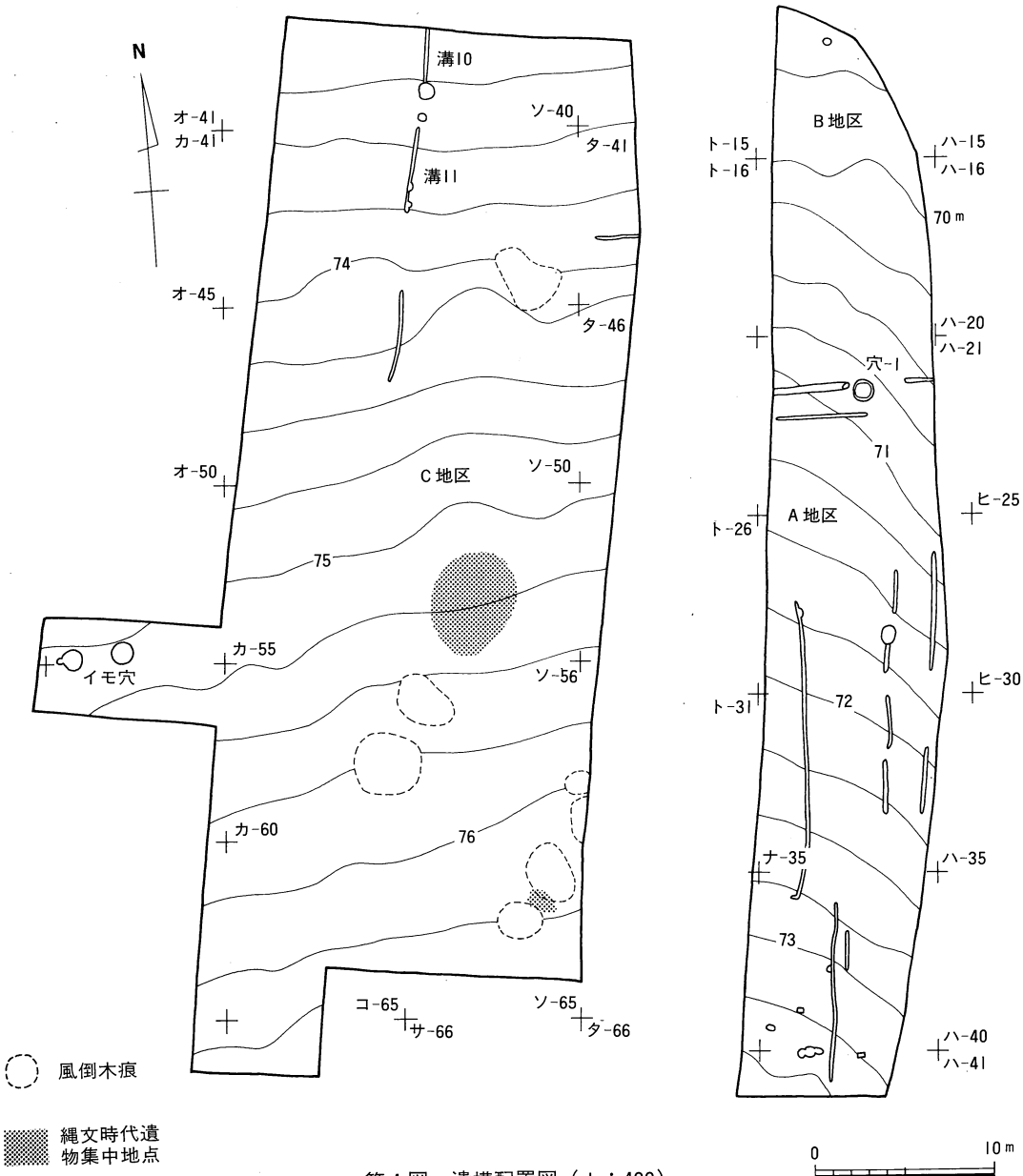


第３図　調査区及び地形（１：1,500）

Ⅲ　調査の概要

調査は、区画整理工事に伴う削平部分(Ａ・Ｂ地区)および管理用道路敷設部分(Ｃ地区)あわせて約1,800㎡を対象とした。

調査区は、南北に延びる地形に沿って設定した。区割りは２ｍ×２ｍを基準とし、南北方向を北から１、２、３…、東西方向を西からア、イ、ウ…と呼ぶこととした。



第４図　遺構配置図（１：400）

遺跡は、標高約70～80ｍの台地縁辺部に立地し、東側は急崖から緩斜面を経て境野新扇状地面に至る。扇状地面との比高差は20～30ｍを測る。南側には深い開析谷が形成されており、それをせきとめて行付池が作られている。遺跡全体の地形は、南辺が最も高く、北に向かって緩やかに傾斜する。遺跡の北端は東へ開く開析谷に面しており、この開析谷を隔てた北側には、縄文時代および平安時代の畑総No.26・27遺跡が存在する。

遺跡の基本層序は、

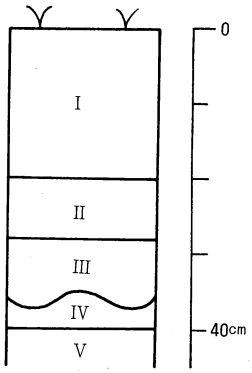
第Ⅰ層　暗褐色土（表土）

第Ⅱ層　黒褐色土（炭化物を含む）

第Ⅲ層　暗褐色土（炭化物を含む）

第Ⅳ層　黄色土（地山への漸移層）

第Ⅴ層　黄色地山土（粘性土）



第５図　層序模式図（ヌ―25区）

となる。層厚は、約30～35cmを測るが、東端の崖縁側に近づくにつれ第Ⅱ層、第Ⅲ層が厚みを増す。

遺物包含層は第Ⅱ層および第Ⅲ層であるが、耕作などの撹乱により第Ⅰ層からも遺物が多く検出されている。遺物の平面分布については、東端の崖縁側に偏る傾向にあり、遺構の検出についても同様である。

Ⅳ　遺構と遺物

検出された遺構には、縄文時代の遺物集中地点２カ所、奈良～平安時代の包含層・穴・ピット・溝および時代不明の溝・ピットなどがある。これらの遺構・遺物は、台地の東側崖縁付近に集中する傾向にある。崖縁から離れるにつれ遺構数は減少する。

遺構の一部には現在のものも含まれる。この地域では所有地を明示するためその境界に幅20～30cmの溝を掘る慣習があり、溝の幾本かはこの境界溝と考えられる。また、イ―55区付近で検出された穴２基は底面に小ピットを有し、いわゆるイモ穴として使用されたものと考えられる。

Ｃ地区東南部においては、大小の風倒木痕が密に認められた。

遺物は、縄文時代前期・中期、奈良～平安時代および近～現代のものがある。

縄文時代の遺物は主としてＣ地区東南部において、奈良～平安時代の遺物は主としてＡ地区において検出した。

出土遺物には、縄文式土器、石器、須恵器、土師器があり、出土量のほとんどを須恵器が占める。

遺物が遺構に伴なって出土した例は、後述するようにわずかであり、開ヶ丘狐谷遺跡においての遺構と遺物の相関関係は極めて稀薄なため、遺跡の性格は明らかにしにくい。

1．縄文時代の遺跡と遺物

縄文時代の遺構には、遺物集中地点２カ所がある。

(1)　縄文時代前期の遺物集中地点（第７図､図版５の１）

Ｃ地区南東部分、タ～チ―62～63区において約２㎡の範囲に縄文時代前期の土器５点を検出した。出土層位は地山面直上の第Ⅳ層であるが、検出位置には風倒木痕が密に存在するため、原位置を遊離している可能性が大きい。周辺部の精査を行ったがこれに伴う遺構は検出できなかった。

出土した縄文式土器５点はいずれも胎土に繊維を含むもので、縄文時代前期前葉に位置づけられる。第７図１～３は同一個体に属し、文様はＬ・Ｒの縄文を施文する。胎土には多量の繊維と石英・長石粒が含まれる。２の器壁には炭化物が厚く付着する。４はＬ・Ｒの縄文を施文し、胎土に多くの繊維を含む。これらの土器片はいずれも摩滅が著しい。

(2)　縄文時代中期の遺物集中地点（第６・７図、図版５の２・３・５）

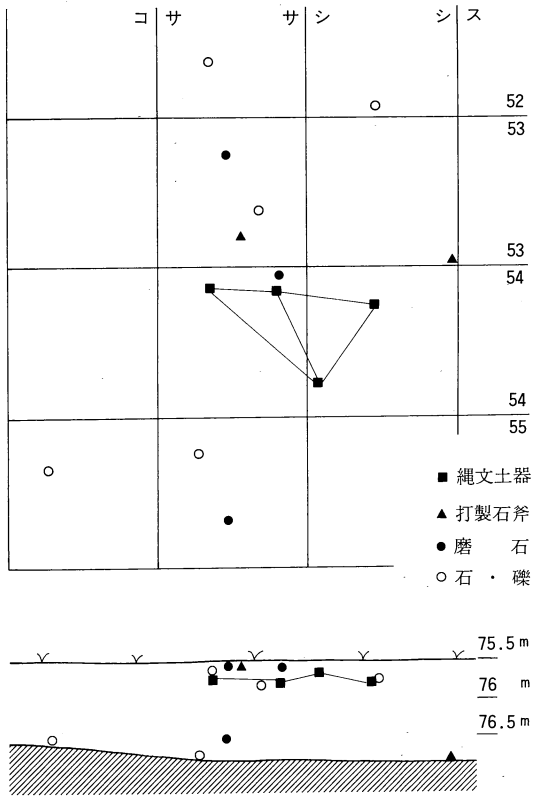
Ｃ地区のほぼ中央部、シ～ス―53～55区において､約４ｍ×５ｍの範囲に縄文時代中期の土器･石器の集中する地点を検出した（第６図)。

遺物の出土層位は第Ⅳ層中の磨石１点を除き、ほぼ表土中あるいは第Ⅱ層上部であり、原位置を遊離したものと考えられる。集中地点付近を精査したが、これらと関連のある遺構は検出できなかった。

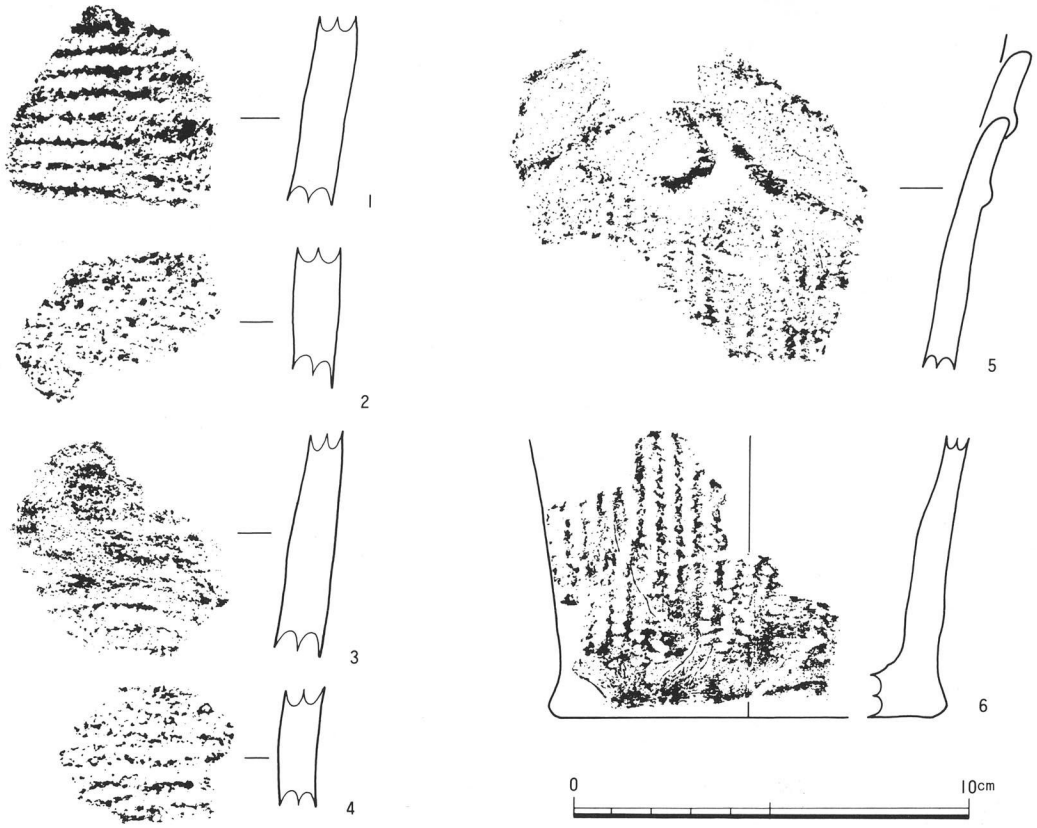
出土遺物の内訳は、縄文式土器１個体分４点、打製石斧２点、磨石･穀擦石３点である。遺物の集中分布をみると、集中範囲の中央に縄文式土器１個体があり、その周辺に打製石斧･磨石･穀擦石や礫が分布する。

縄文式土器(第６図の５，６)は、４波頂？の波状口縁をもつ深鉢形土器で、波頂部直下に渦巻状の隆帯を設ける。隆帯の上には施文を行わず、これを境に口縁部側は無文、胴部にはＬ・Ｒの縄文を施す。縄文時代中期後葉の串田新Ⅱ式に比定されるものである。

打製石斧(図版５の５)は、撥形のものと両側辺の抉りの浅い分銅形のものがある。いずれも片面に大きく礫表皮を残している。



第６図　縄文時代遺物出土状況



第７図　縄文式土器拓影（１/２）

２．奈良～平安時代の遺構と遺物

奈良～平安時代の遺構には、遺物包含層、穴、ピット、溝が検出されている。これらの遺構は調査区全体に分布するが、特に穴、ピット、溝は台地の東側崖縁にあたるＡ地区に集中する。Ｃ地区においてはピット、溝があるが、遺構の分布は粗である。

(1)　遺物包含層（第８図）

奈良～平安時代の遺物として須恵器100点以上を検出している。これらは表土～第Ⅲ層中の出土であり、特に表土および第Ⅱ層上部からの出土が多い。

平面分布についてみると、Ａ地区南半部ニ～ノ―36～41区に濃密な分布を示し、それ以北は極めて粗になる。穴―１の存在する22区以北には出土していない。また、Ｃ地区においては、コ～チ―45～51区の範囲およびサ―39～43区における溝、ピットなどに伴って須恵器の出土があるが、分布密度はＡ地区に比べ粗である。包含層における須恵器の接合関係は認められず、また完形個体もない。

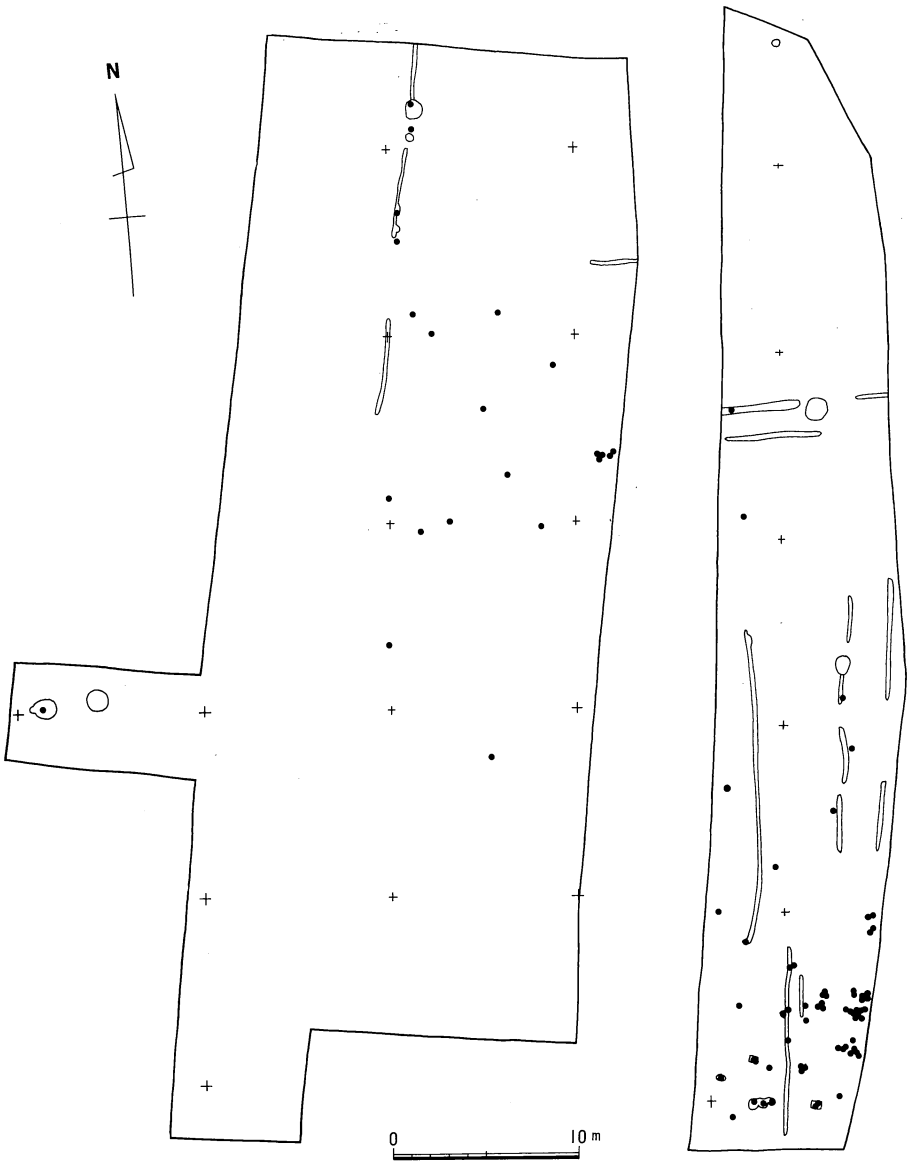
(2)　穴（第９図の１）

Ａ地区ヌ～ネ―22区において、いわゆる焼壁ピットを１基検出した。径約1.2ｍ、地山面からの

深さは約30cmを測る。横断面形は浅い皿状を呈し、中央部分は周囲より約５cm緩く窪んでいる。西壁は樹根の撹乱により遺存しない。底面および壁面は十分に焼けておらず、赤燈色の焼土がブロック状になって残っている。

ピットの覆土は炭化物細片を含む褐色土であり、底面直上では炭化物片が密になる。

出土遺物は、北西壁寄りの覆土上層から被熱して破砕した礫片が出土した。



第８図　須恵器出土分布

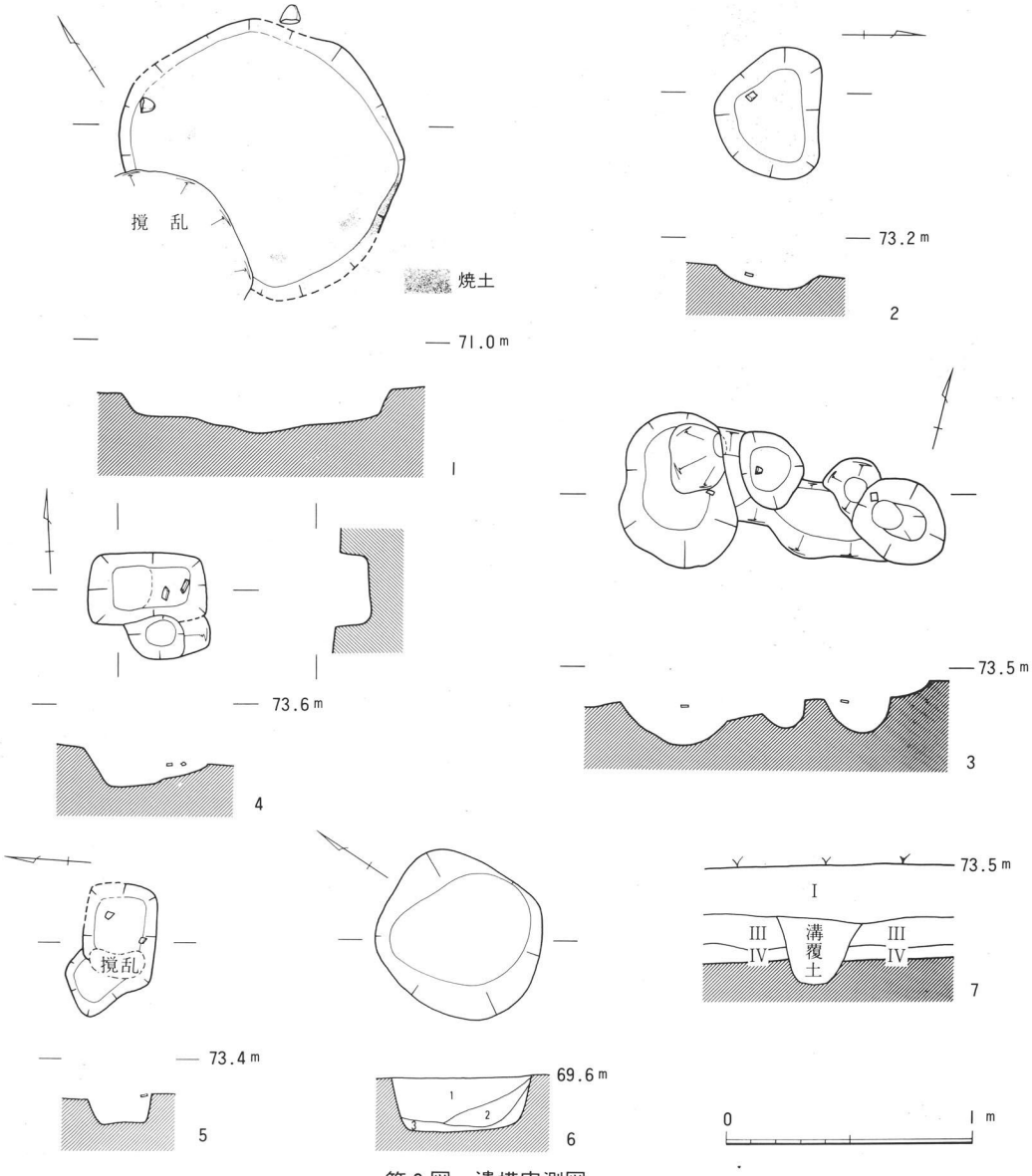
(3) ピット

調査区において120基以上のピットを検出した。ピットは径約20～30cm、深さ10～30cmのものが多く、形状はほぼ円形を呈する。分布はＡ地区に大半が集中している。

ピットの覆土中から須恵器が出土した例は６基のみであり、いずれもＡ地区南半部である。それ以外のピットは出土遺物がなく、時期や性格を把握できなかった。

① Ｐ－１（第９図２）

Ａ地区ナ－40区において検出した。50cm×50cmの不整円形で、深さ７cm。横断面形は浅い皿状を示す。南壁寄りの覆土中層から須恵器細片１点が出土した。



第９図　遺構実測図

② Ｐ－２

Ａ地区ナ－41区において検出した。ピット底部から被熱した礫細片１点が出土。

③ Ｐ－３・Ｐ－４（第９図３、第10図７）

Ａ地区ニ－41区において検出した。

Ｐ－３は65cm×50cmの南北に長い楕円形プランを示す。北東コーナーは撹乱を受けている。遺物は須恵器１点が東壁寄りの覆土上層から出土した。

Ｐ－４は40cm×30cmの東西に長い楕円形プランを示す。西壁は撹乱により失われている。遺物は須恵器１点が西寄りの覆土上層から出土した。

Ｐ－３とＰ－４の間には、30cm×25cmの楕円形ピットがあり、覆土上層から須恵器１点（第10図７）が出土したが、ピット上部は全体に撹乱を受けていた。

須恵器は杯の蓋部で、径約16cm。端部は短くシャープに外反する。

④ Ｐ－５（第９図４、第10図１）

Ａ地区ヌ－41区において検出した。径約50cm×30cmの東西に長い長方形プランである。壁面は垂直ぎみに立上がり、西壁で深さ15cmを測る。東側は浅くなる。南壁は径約20cmの柱穴状ピットと重複する。

遺物は東半部の覆土上層から須恵器２点が出土した。第10図は１は杯の身部で、口径約11cmを測る。受口部は厚みがあり、短く内傾する。

⑤ Ｐ－６（第９図５）

Ａ地区に－39区において検出した。径約40cm×30cmの東西に長い長方形プランである。壁面は垂直ぎみに立上がり、中央部で深さ10cmを測る。北東コーナーと西壁は樹根で撹乱を受けている。遺物は須恵器２点が壁寄りの覆土上層から出土した。

(4) 溝（第９図７）

Ａ地区で９本、Ｃ地区で４本の溝を検出した。溝の形態は、幅10～30cm、深さ５～10cmで、長さは２～17ｍまで長短がある。平面形は、緩く蛇行するもの（溝２）と大きくカーブするもの（溝３）とがある。Ｃ地区の溝10は第Ｉ層直下から掘りこまれており、セクション（第９図７）の観察によれば原形は幅35cm、深さ25cmの溝であり、覆土は黄色地山粒を含む暗褐色土の単純層となる。検出面からは深さ10cmが残る。このことから溝は掘削後間もなく埋没したことがわかる。

溝のうち覆土中に須恵器を伴ったものは、Ａ地区の溝２、３とＣ地区の溝10、11である。出土した須恵器はいずれも小断片で、単独出土である。

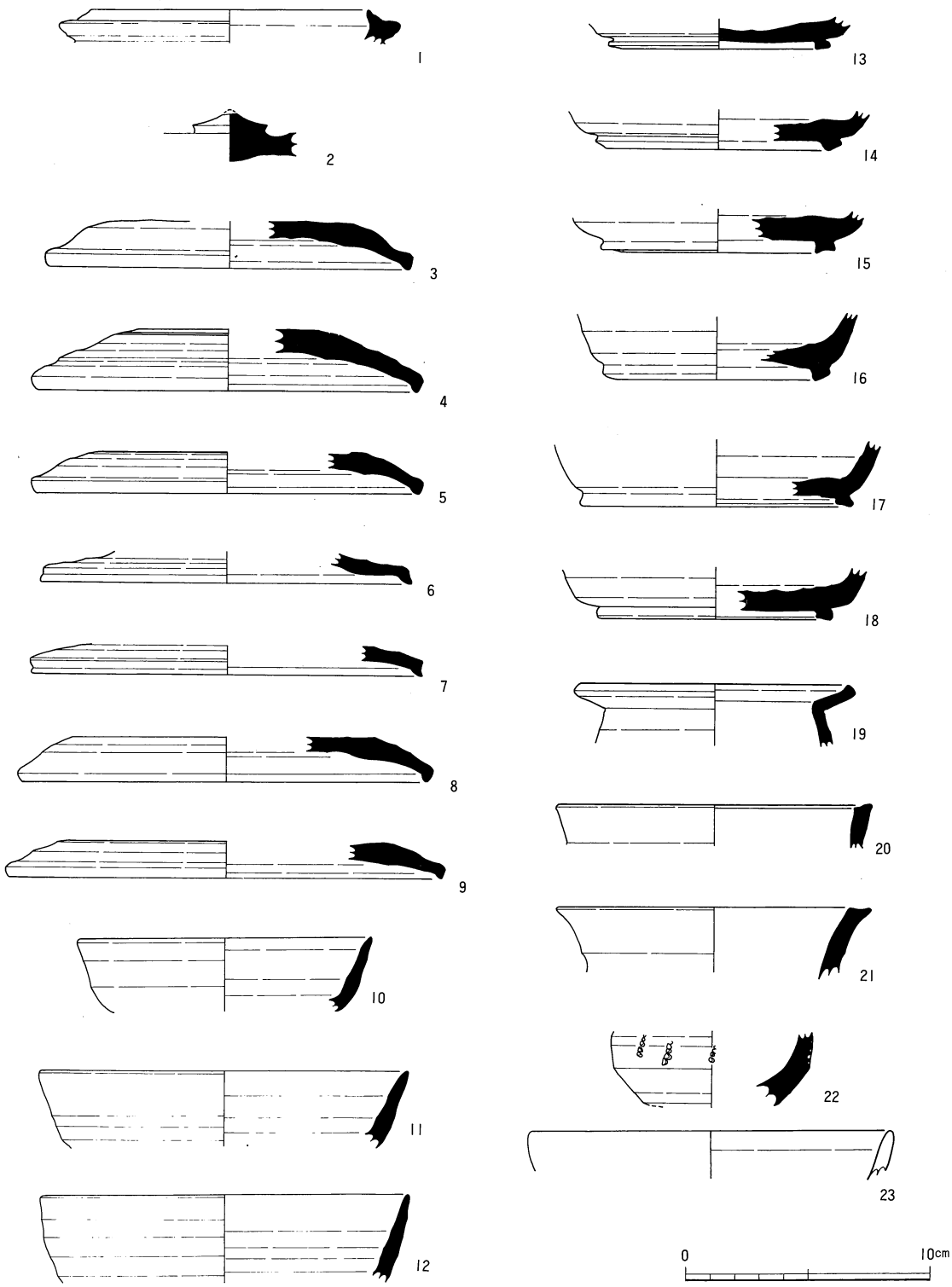
(5) 出土遺物（第10、11図）

出土遺物は、古墳時代の須恵器１点のほかは、すべて奈良～平安時代の須恵器・土師器である。

古墳時代の須恵器は、Ａ地区Ｐ－５出土の杯身（第10図１）である。

奈良～平安時代の須恵器には、蓋、杯、壺、甕などがあるが、すべて破片である。出土量は甕が多くを占める。蓋・杯・壺はＡ地区南半部からの出土が多い。

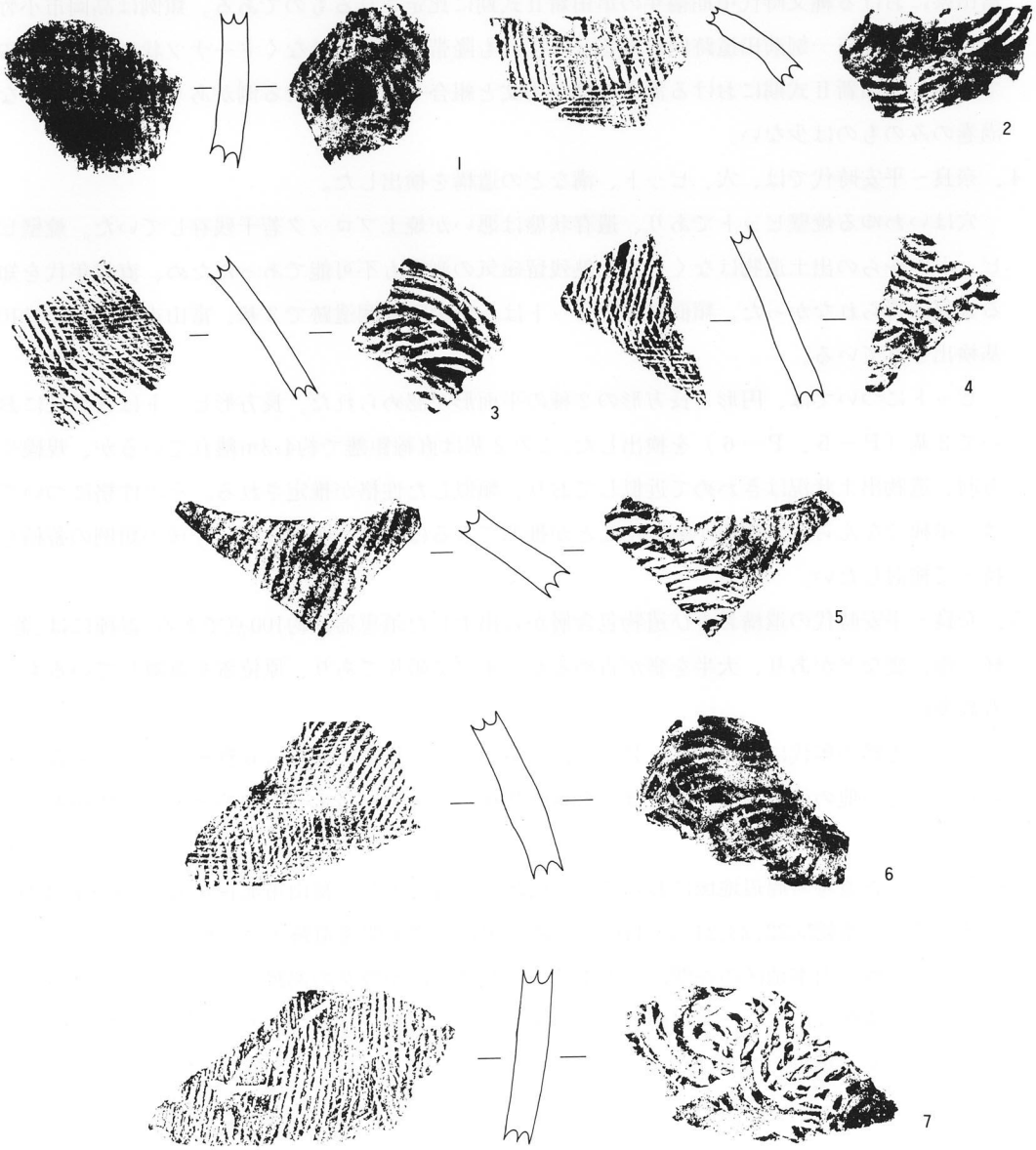
蓋（第10図２～９） 法量は、口径15～18cm、天井部までの器高1.5～2.5cmを測る。つまみ部(2)



第10図　須恵器・土師器実測図(1/3)

は偏平な宝珠形のものが１点のみ出土している。天井部にはヘラ削りを施すもの(3.8)がある。口縁端部が嘴状に屈曲して外反するものと、短く内屈してやや丸みを帯びるものとがあり、後者の数量が多い。

杯（第10図10～18）　器形の復元できるものはないが、検出したものはすべて高台を持つ杯身である。体部はほぼ直線的に立ち上がる。法量は、口径12～15cm、高台径９～11cmを測る。底部の切り離しは、ほとんどがヘラ切り後ナデを行うが、１点のみ回転糸切り痕を残すものがある。高台は低く、外方へやや広がる形態である。



第11図　須恵器拓影

0　5cm

V まとめ

1．開ヶ丘狐谷遺跡は、縄文時代前期・中期および奈良～平安時代にわたる複合遺跡である。

2．縄文時代では、前期前葉および中期後葉串田新Ⅱ式期の遺物集中地点各１カ所を検出した。いずれも原位置を遊離している可能性が大きいが、周囲に明確な遺構を検出しえなかったところから、キャンプサイト的な性格の遺跡と推定される。

3．縄文時代中期後葉の深鉢形土器は、波状口縁の器形をもち、渦巻状の降帯を付けるもので、富山県における縄文時代中期編年の串田新Ⅱ式期に比定されるものである。類例は高岡市小竹薮遺跡、氷見市一刎前田遺跡例があるがいずれも隆帯は渦巻ではなくドーナツ状に閉じるものである。串田新Ⅱ式期における渦巻きは楕円文と組合せて用いられる例があり、本例のような渦巻のみのものは少ない。

4．奈良～平安時代では、穴、ピット、溝などの遺構を検出した。

穴はいわゆる焼壁ピットであり、遺存状態は悪いが焼土ブロック若干残存していた。焼壁ピピット内からの出土遺物はなく、また熱残留磁気の測定も不可能であったため、直接年代を知る資料は得られなかった。類似の焼壁ピットは、婦中町新開遺跡で３基、富山市野下遺跡で10基検出されている。

ピットについては、円形と長方形の２種の平面形が認められた。長方形ピットはＡ地区において２基（Ｐ－５、Ｐ－６）を検出した。この２基は直線距離で約4.3m離れているが、規模や方向、遺物出土状況はきわめて近似しており、類似した性格が推定される。その性格については、単独でなんらかの機能があったことが推測できるほかは不明であり、今後の類例の蓄積を持って検討したい。

5．奈良～平安時代の遺構および遺物包含層から出土した須恵器は約100点である。器種には、蓋、杯、壺、甕などがあり、大半を甕が占めるが、すべて破片であり、原位置を遊離しているものも数多い。

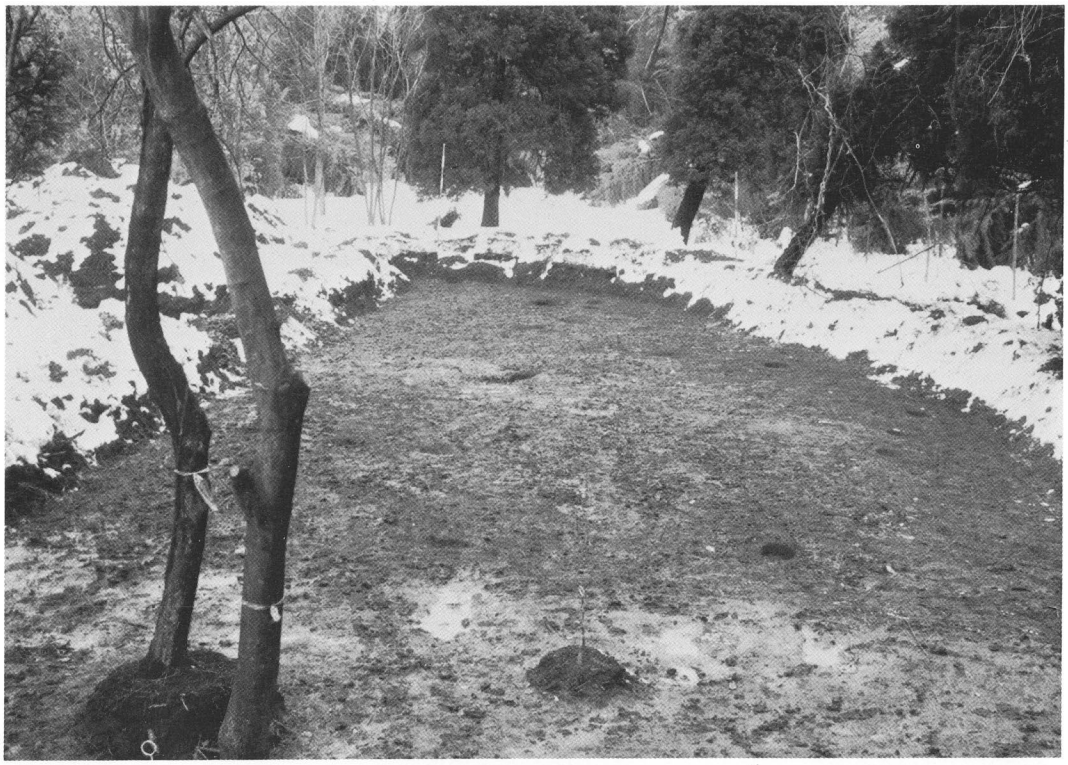
出土須恵器の年代については、Ｐ－５出土須恵器が古墳時代後期（６世紀後半）に位置付けられる。その他の須恵器については、奈良時代後半（８世紀後半）を中心とした年代が考えられる。

6．開ヶ丘狐谷遺跡の周辺地域においては、同時期の遺跡として富山市北押川遺跡、墓ノ段遺跡、御坊山遺跡、畑総No.22、23、24、29、116、202 跡が窯跡、窯業関連遺跡として群をなしており、ままた約１km西の山本地区の谷間にも山本藤ノ木窯跡のほか数基の窯跡の存在が知られている。開ヶ丘狐谷遺跡はこれら一連窯跡群との関連の中でとらえられるべきものであり、特に本遺跡直下に存在する畑総No.202遺跡との強い緊密性の中で理解されるものであろう。

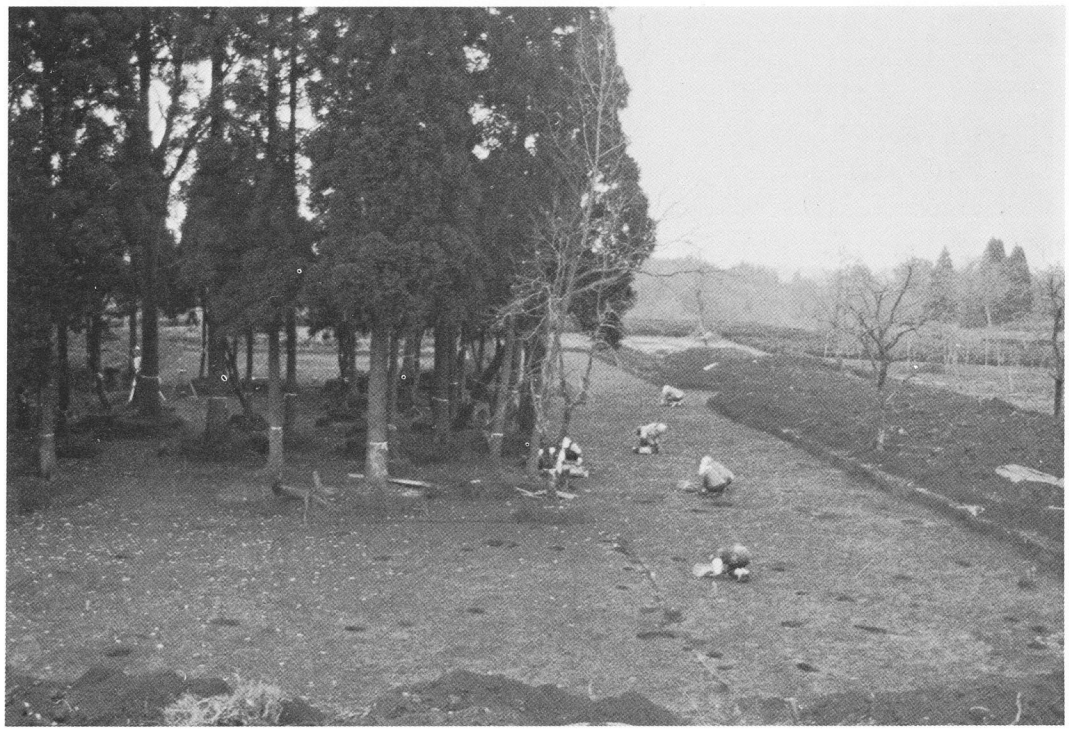
遺跡遠景(北東から)

A 地区全景(南から)

図版2



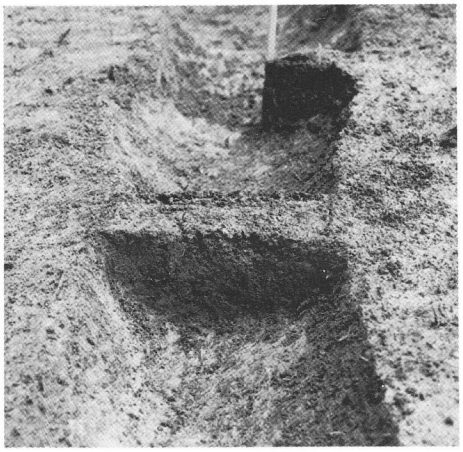
B地区全景(南から)



C地区全景(北から)

A地区　溝1、2

C地区　溝10、11



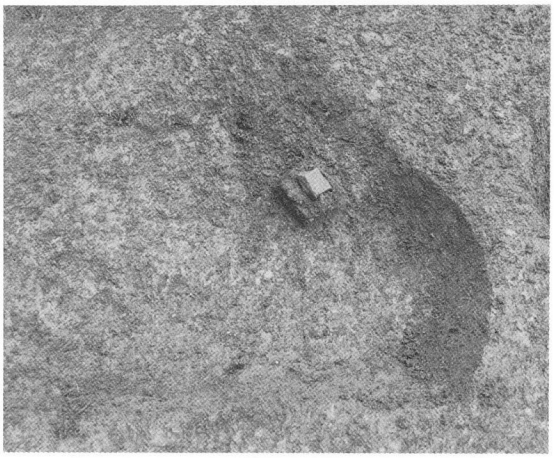
溝2土層

溝10土層

図版4

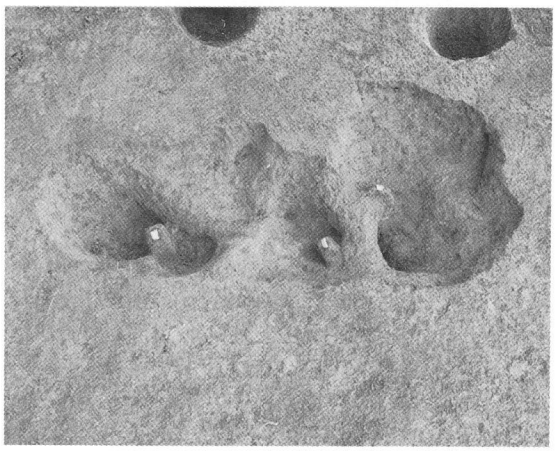
A地区焼壁ピット完掘状況

A地区　P－5

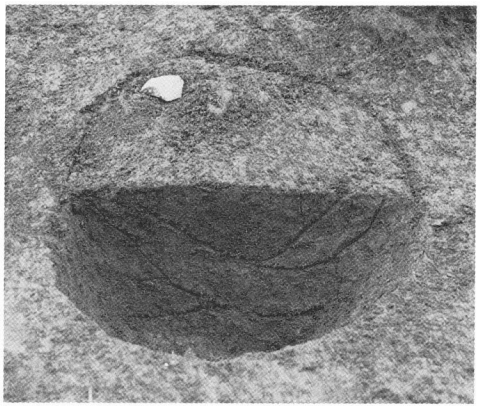


A地区　P－1

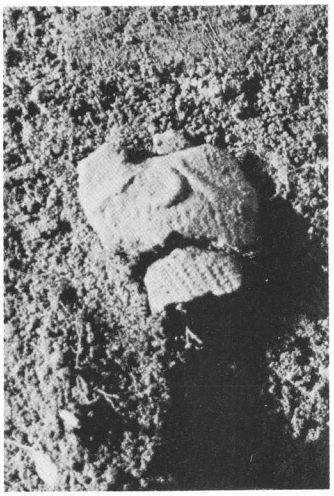
A地区　P－6



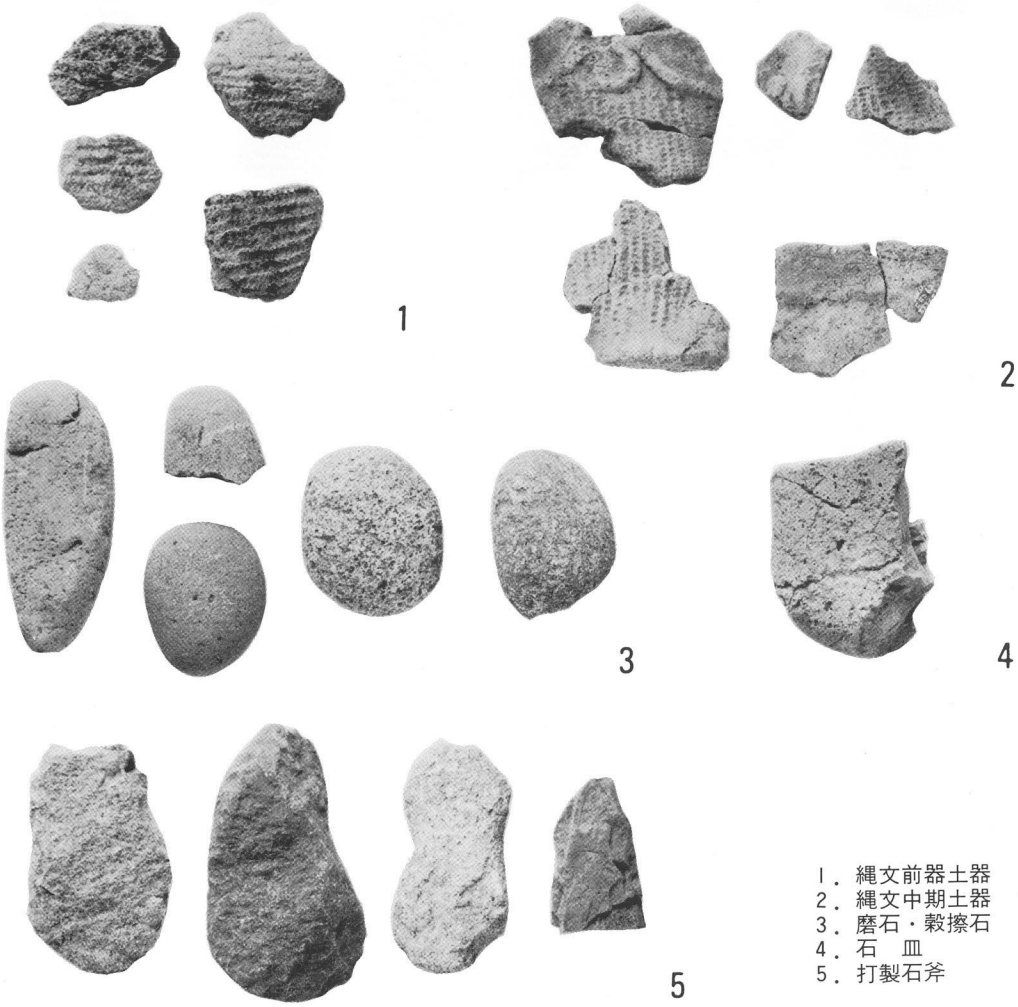
A地区　P－3、4



C地区　P－1



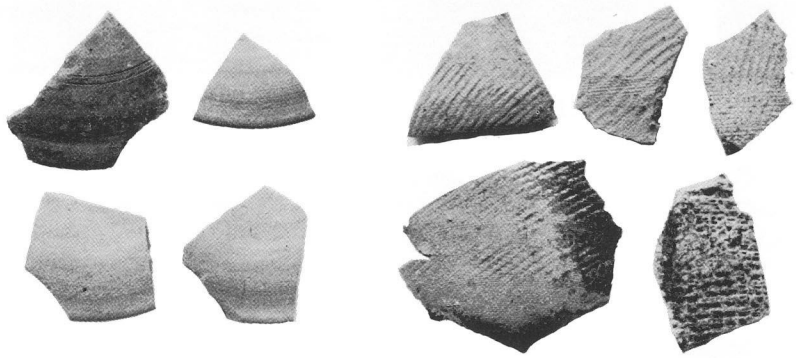
縄文時代遺物出土状況（C地区）



1．縄文前器土器
2．縄文中期土器
3．磨石・穀擦石
4．石　皿
5．打製石斧

縄文時代遺物

杯蓋・杯身・壺



左　杯蓋
右　甕ほか

甕ほか

同上裏面

須　恵　器

開ヶ丘狐谷遺跡Ａ地区発掘調査報告

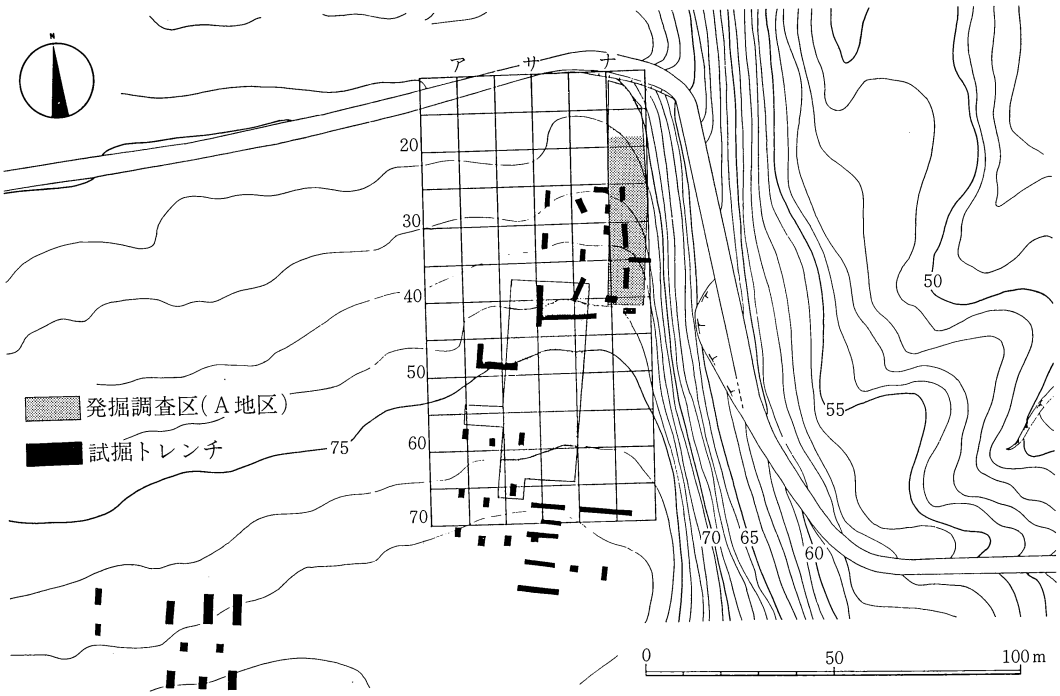
１．調査の概要

調査は、区画整理地周辺に敷設される管理用道路（幅員４ｍ）および排水路部分で掘削工事を伴う部分約450㎡を対象として行った。

調査区は、遺跡全体について、南北に延びる地形に沿って設定し、２ｍ×２ｍのグリッドを基準として区割りを行った。グリッドの名称は南北方向を北から１、２、３…、東西方向を西からア、イ、ウ…と呼ぶこととした。Ａ地区はこのうち、ト～ハ―19～42区の範囲に該当する。

遺跡は、標高約70～80ｍの台地縁辺部に立地し、東側は急崖から緩斜面を経て境野新扇状地面に至る。扇状地面との比高差は20～30ｍを測る。遺跡全体の地形は、南辺が最も高く、北に向かって緩やかに傾斜する。遺跡の北端は東へ開く開析谷に面しており、この開析谷を隔てた北側には、縄文時代および平安時代の畑総№26、27遺跡が存在する。

・調査区は、遺跡の北東側縁辺部にあたり、標高70～74ｍを測る。地形は南から北に向かって緩やかに傾斜している。地山面の標高は、70.2～73.5ｍを測り、北東部分では東側へやや落ち込んでいる。



第12図　調査区及び周辺の地形

遺跡の基本層序は、

第Ⅰ層　暗褐色土（表土）

第Ⅱ層　黒褐色土（炭化物を含む）

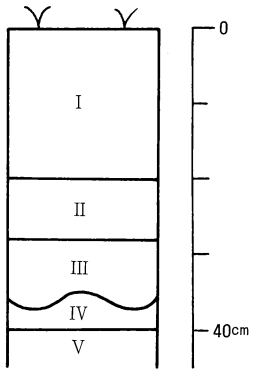
第Ⅲ層　暗褐色土（炭化物を含む）

第Ⅳ層　黄色土（地山への漸移層）

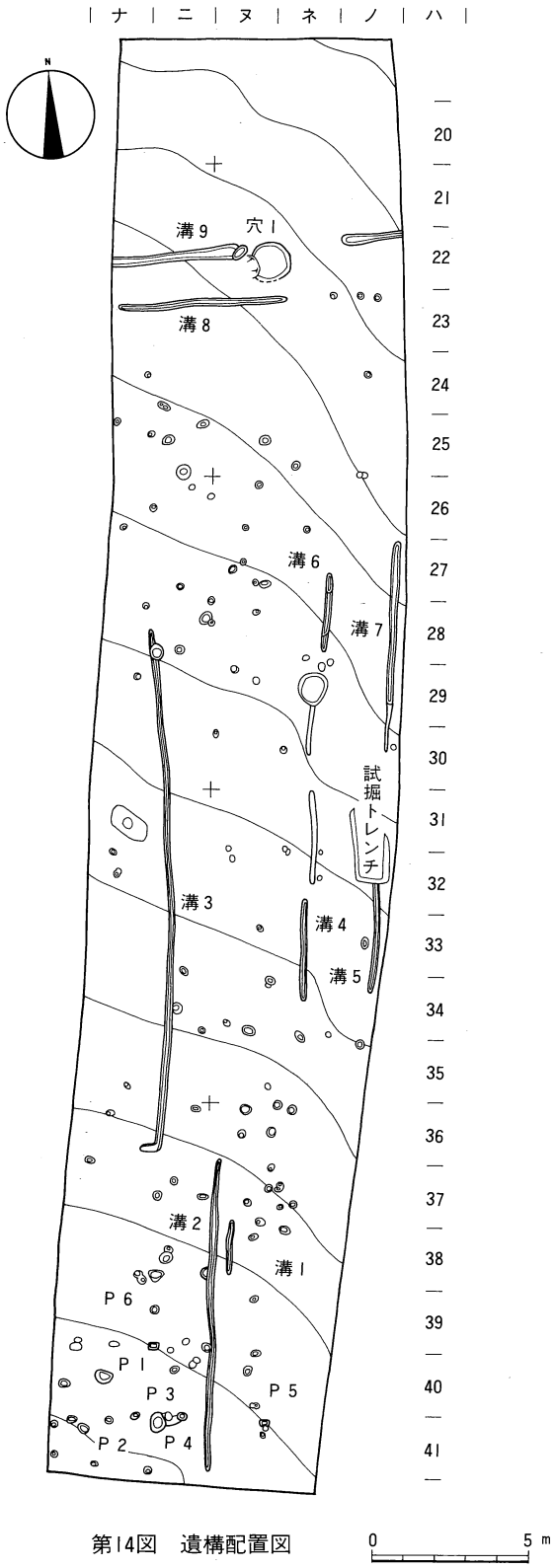
第Ⅴ層　黄色地山土（粘性土）

となる。層厚は、調査区西端で約20cmを測り、東端の崖縁側に近づくにつれ第Ⅱ層、第Ⅲ層が厚みを増し、80～90cmを測る。

遺物包含層は第Ⅱ層および第Ⅲ層であるが、耕作などの撹乱により第Ⅰ層からも遺物が多く検出されている。遺物の平面分布については、東端の崖縁側に偏る傾向にあり、遺構の検出についても同様である。



第13図　層序模式図(ヌ—25区)



第14図　遺構配置図

2．遺構と遺物

検出された遺構には、奈良～平安時代に属する遺物包含層・穴・ピット・溝などがある。これらの遺構は、調査区全体にわたって存在するが、平坦面から斜面にかかる地形の変換点を境に、平坦面側に遺構が分布する。特に南側に集中する傾向にあり、遺物を出土する遺構もこの南側に集中している。

出土遺物には、縄文式土器、奈良～平安時代の須恵器がある。縄文式土器は無文の底部片で所属時期等は不明である。

以下、遺構・遺物の概要について述べる。

(1) 遺物包含層（第15、16図）

第Ⅰ層（表土）～第Ⅲ層から須恵器片50点余りが出土した。全体的に第Ⅰ層（表土）および第Ⅱ層上部からの出土が多く、二次的に移動している可能性がある。

平面分布についてみると、ヌ―39区を中心とした直径10ｍの範囲にほとんどが集中し、特にヌ―38区、ネ―38区、ネ―39区からの出土量が多い。35区より北側は分布が粗になり、30区以北はほとんど出土が認められない。

包含層における須恵器の接合関係は認められなかった。また完形個体は検出できず、すべて断片で出土した。

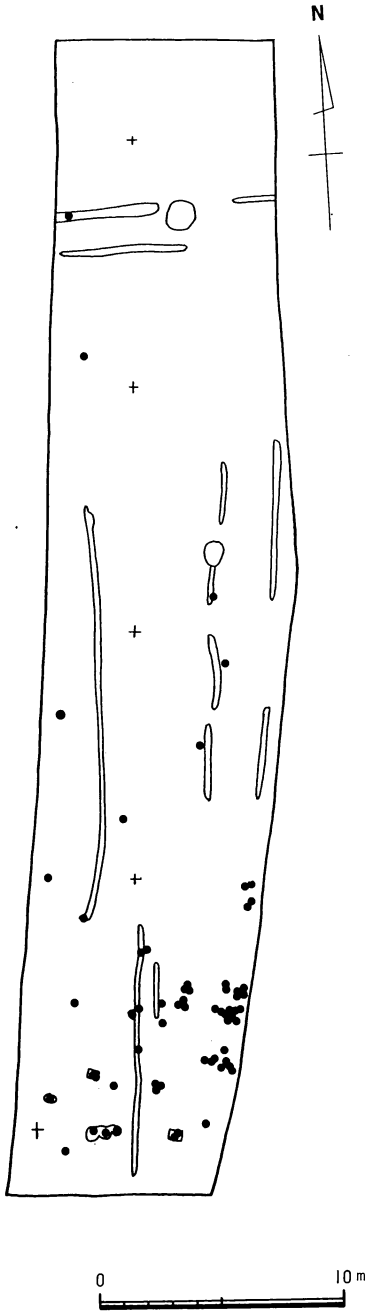
包含層出土の須恵器は第16図に示した。器種には蓋、杯、壺、甕などがあり、出土量の大半を甕が占める。

蓋（第16図１～４）

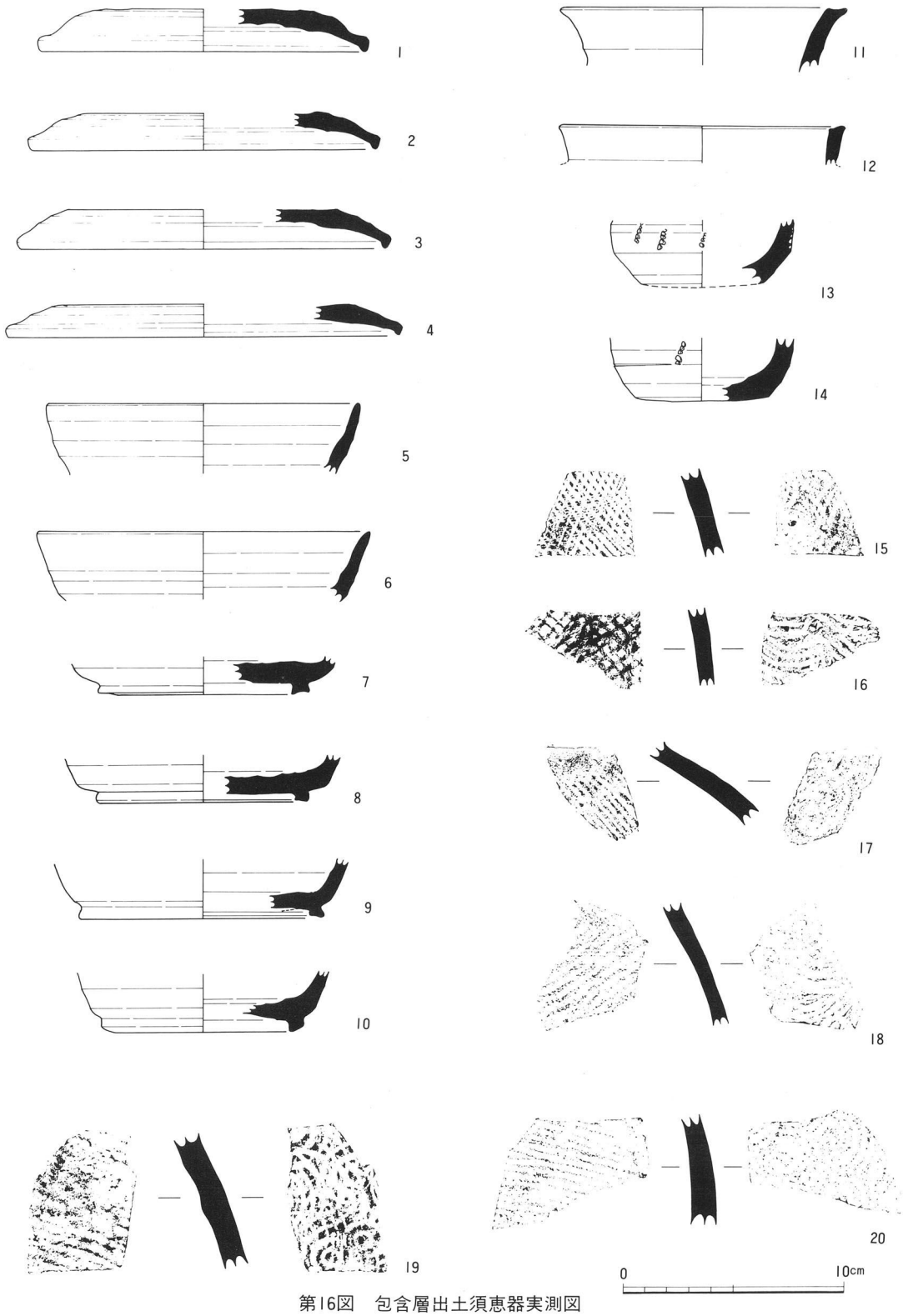
杯蓋である。法量は、口径15～18cm、天井部までの器高1.5～2.0cmを測る。天井部の口径に占める割合は65～70％と広い。１、３は天井部にヘラ削りを施す。口縁端部は短く内屈してやや丸みを帯びるものとなっている。つまみ部は出土しておらず、形態は不明である。

杯（第16図５～10）

器形の復元できるものはないが、検出したものはすべて高台を持つ杯身である。体部はほぼ直線的に



第15図　須恵器　出土分布



第16図　包含層出土須恵器実測図

立ち上がる。口縁端部はやや内側に向くものと外反ぎみのものがある。法量は、口径12～15cmを測る。底部の切り離しは、ほとんどがヘラ切り後ナデを行うが、１点のみ回転糸切り痕を残すものがある。高台は低く、外方へやや広がる形態であり、高台径９～11cmを測る。

壺（第16図13、14）

小型壺の底部破片と思われる。胴部にかかる部分に櫛歯状工具による刺突文が斜めに施文される。底部外面はヘラ削りによって整形されている。13、14は同一個体と考えられ、14は試掘調査時に第47トレンチから出土したものである。

甕（第16図11、12、15～20）

11、12は径13cmの小型甕の口縁部破片である。15～20は体部片である。外面には格子目状タタキ、平行タタキが施され、カキ目調整を行うものがある。内面には同心円状あて具痕が残る。

(2)　穴（第17図）

ヌ～ネ―22区において、穴１基を検出した。底面、周壁の一部が焼けており、いわゆる焼壁ピットとされるものである。径約1.2ｍの円形プランを呈し、地山面からの深さは約10cmを測る。横断面形は浅い皿状を呈し、底面中央部分径40cm程は周囲より約５cm窪んでいる。西壁は樹根の撹乱により遺存しない。

底面および壁面は十分に焼けておらず、赤燈色の焼土がブロック状になって残っている。

ピットの覆土は炭化物細片を含む褐色土であり、底面直上では炭化物片が密になる。

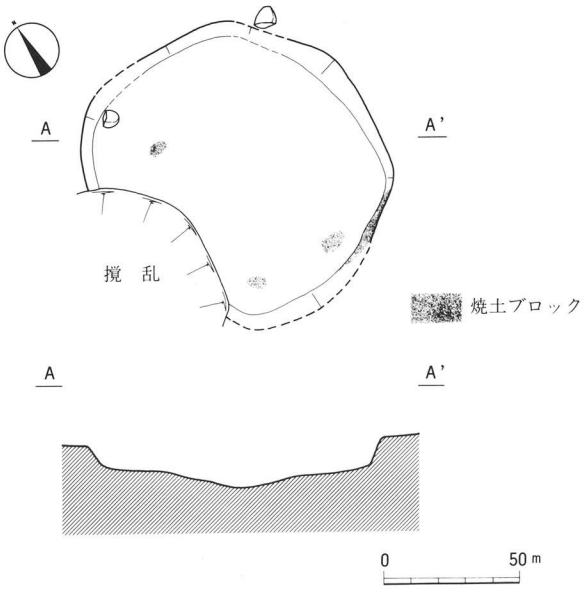
出土遺物は、北西壁寄りの覆土上層から被熱して破砕した礫片が１点出土した。

(3)　ピット（第18図）

調査区において120基以上のピットを検出した。ピットは径約20～30cm、深さ10～30cmのものが多く、形状はほぼ円形を呈する。

遺構の分布は22区以南の調査区全体にわたっているが、平坦面から斜面にかかる地形変換点を境に平坦面側に認められる。特に36区以南に集中し、この範囲に遺物を出土するピットも含まれる。

ピットの覆土中から須恵器が出土した例は６基である。それ以外のピットは出土遺物がなく、時期や性格を把握できなかった。



第17図　焼壁ピット実測図

①　Ｐ―１（第18図１）

ナ―40区において検出した。50cm×50cmの不整円形で、深さ７cm。横断面形は浅い皿状を示す。南壁寄りの覆土

中層から須恵器細片１点が出土した。

②　Ｐ－２

ナ－41区において検出した。ピット底部から被熱した礫細片１点が出土。

③　Ｐ－３・Ｐ－４（第18図２）

ニ－41区において検出した。

Ｐ－３は65cm×50cmの南北に長い楕円形プランを示す。北東コーナーは撹乱を受けている。遺物は須恵器１点が東壁寄りの覆土上層から出土した。

Ｐ－４は40cm×30cmの東西に長い楕円形プランを示す。西壁は撹乱により失われている。遺物は須恵器１点が西寄りの覆土上層から出土した。

Ｐ－３とＰ－４の間には、30cm×25cmの楕円形ピットがあり、覆土上層から須恵器１点が出土したが、ピット上部は全体に撹乱を受けている。須恵器は杯の蓋部で、径約16cm。端部は短くシャープに外反する。

④　Ｐ－５（第18図３）

ヌ－41区において検出した。径約50cm×30cmの東西に長い長方形プランである。壁面は乗直ぎみに立上がり、西壁で深さ15cmを測る。東側は浅くなる。南壁は径約20cmの柱穴状ピットと重複する。

遺物は東半部の覆土上層から須恵器２点が出土した。上は杯の身部で、口径約11cmを測る。受口部は厚みがあり、短く内傾する。

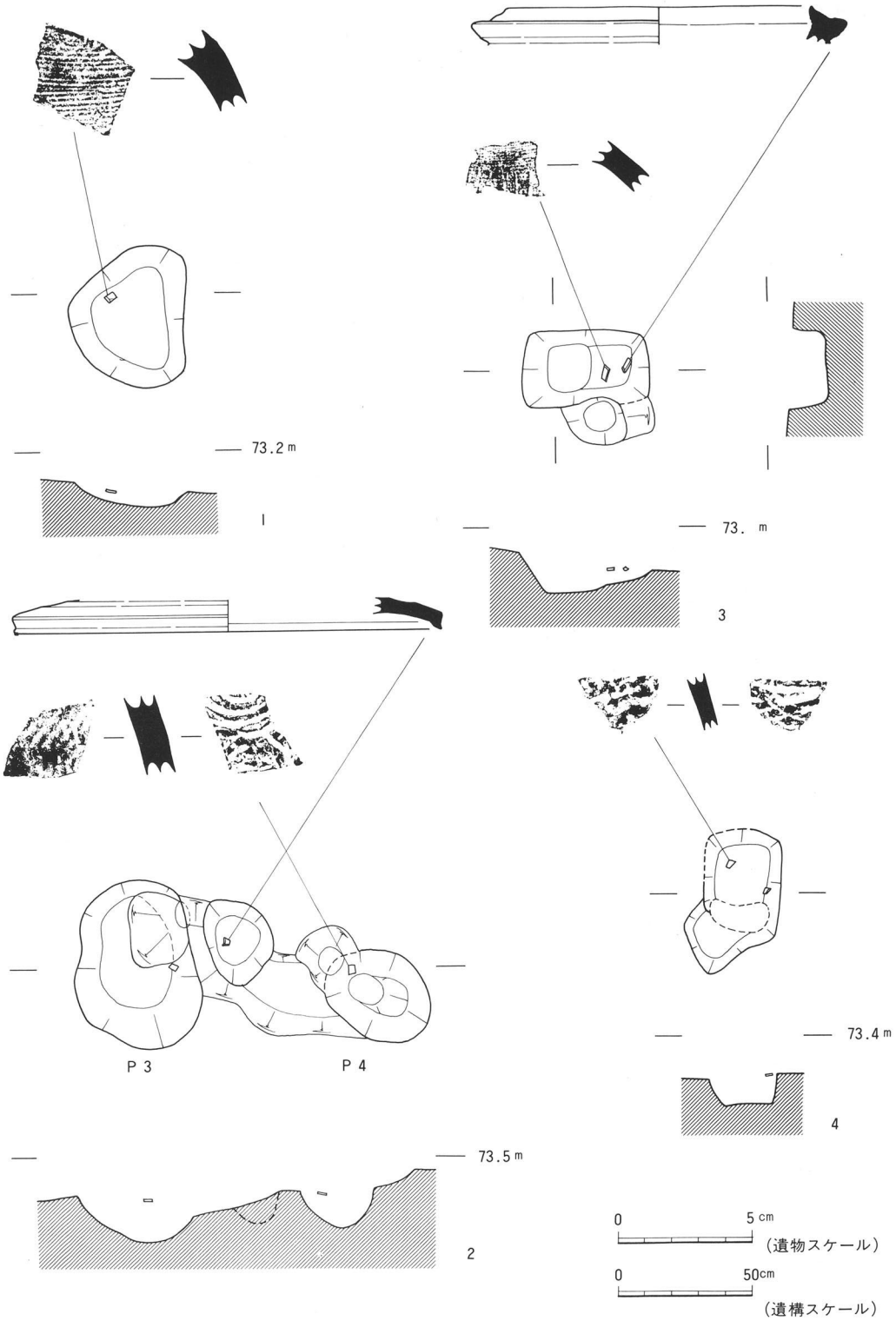
⑤　Ｐ－６（第18図４）

ニ－39区において検出した。径約40cm×30cmの東西に長い長方形プランである。壁面は乗直ぎみに立上がり、中央部で深さ10cmを測る。北東コーナーと西壁は樹根で撹乱を受けている。遺物は須恵器２点が壁寄りの覆土上層から出土した。

(4)　溝

９本の溝を検出した。溝の形態は、幅10～30cm、深さ５～10cmで、長さは２～17ｍまで長短がある。平面形は、緩く蛇行するもの（溝２）と大きくカーブするもの（溝３）とがある。覆土は黄色地山粒を含む暗褐色土の単純層である。検出面からは深さ５～10cmが残る。このことから溝は掘削後間もなく埋没したことがわかる。

溝のうち覆土中に須恵器を伴ったものは、溝２、３である。出土した須恵器はいずれも小断片で、単独出土である。



第18図　遺構及び出土遺物

3．まとめ

1．開ヶ丘狐谷遺跡Ａ地区は、奈良～平安時代に属する遺跡であり、穴、ピット、溝などの遺構を検出した。

2．穴はいわゆる焼壁ピットであり、遺存状態は悪いが焼土ブロックが若干残存していた。焼壁ピット内からの出土遺物はなく、また熱残留磁気の測定も不可能であったため、直接年代を知る手がかりは得られなかった。類似の焼壁ピットは、周辺地域において、婦中町新開遺跡で３基、富山市野下遺跡で10基検出されたほか、射水丘陵西部の太閤山地区においても各種の焼壁ピットが発見されている。

本遺跡のような井伴遺物を有しない焼壁ピットの性格については、伏焼き法による炭焼窯、火葬跡、放棄された食料貯蔵庫と考えられているが、今回調査の焼壁ピットについては、いずれの性格かを判断することはできなかった。

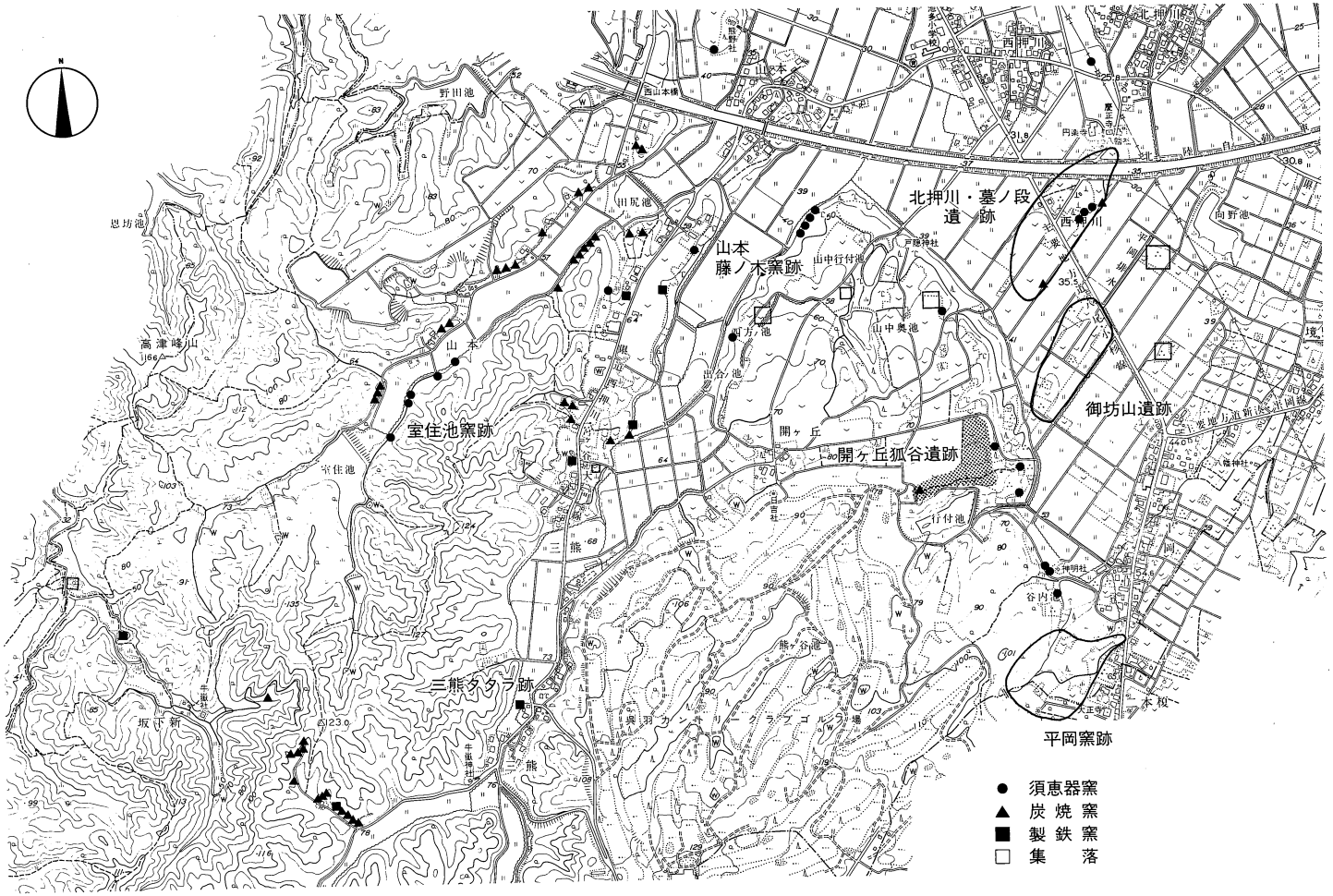
3．ピットについては、円形と長方形の２種の平面形が認められた。長方形ピットは２基（Ｐ－５、Ｐ－６）を検出した。この２基は直線距離で約4.3ｍ離れているが、規模や方向、遺物出土状況はきわめて近似しており、類似した性格が推定される。その性格については、柱穴、貯蔵穴などの機能を推定できるが、明確に判断することはできなかった。今後の資料の蓄積を待って検討したい。

4．奈良～平安時代の遺構および遺物包含層から出土した須恵器は約50点である。器種には、蓋、杯、壺、甕などがあり、大半を甕が占めるが、すべて破片であり、原位置を遊離しているものも多いと考えられる。

出土須恵器の年代については、Ｐ－５出土杯身が古墳時代後期（６世紀後半）に位置付けられる。その他の須恵器については、蓋の天井部にヘラ削りを行うものがあること、回転糸切りによる底部の切り離しを行うものがあること等から奈良時代後半（８世紀後半）を中心とした年代が考えられる。

Ｐ－５、Ｐ－６の所属時期については、Ｐ－５出土杯身が原位置を保っているものとすれば古墳時代後期と考えられる。原位置であるか混入であるかについて覆土の観察からは明らかにできなかった。

5．開ヶ丘狐谷遺跡の周辺地域においては、奈良時代後半（８世紀後半）を中心とした時期の遺跡として富山市北押川遺跡、墓ノ段遺跡、御坊山遺跡、畑総№22、23、24、29、116、202遺跡が窯跡、窯業関連遺跡として群をなしており、また約１㎞西の山本地区の谷間にも山本藤ノ木窯跡のほか数基の窯跡の存在が知られている。開ヶ丘狐谷遺跡はこれら一連の窯跡群との関連の中でとらえられるべきものであり、特に本遺跡直下に存在する細総№202窯跡との強い緊密性の中で理解されるものであろう。窯業生産集落の構造は、白鳳時代の瓦陶兼業窯が検出された小杉町丸山遺跡で明らかにされている。窯跡のある斜面の頂部には窯業生産に携った集団の竪穴住居跡や段状遺構が構築される。本遺跡のピット等は細総№202窯跡を操業した人々が構築した、窯業生産に関連する遺構と思われる。



開ヶ丘周辺の奈良～平安時代の窯業関連遺跡分布図

引用・参考文献

上野　章・岸本　雅敏・山本　正敏・神保　孝造・斎藤　隆　1984
『小杉流通業務団地内遺跡群　第6次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会

奥村　吉信　1985「中部地方日本海側の石刃石器群」『旧石器考古学』31

奥村　吉信　1985「北陸の東山系石器群」『大境』第9号

小島　俊彰　1974「北陸の縄文時代中期の編年」『大境』第5号

小島　幸雄　1976『富山市杉谷遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会

駒見　和夫　1984「墓制構造の変革を中心とした北陸古墳時代移行期の一検討」『大境』第8号

田上　浩幸・宮田　進一　1985『新開遺跡・新町Ⅱ遺跡発掘調査概報』婦中町教育委員会

竹内理三編　1979『角川日本地名大辞典』16　富山県　角川書店

富山市教育委員会　1973『呉羽丘陵城山南部の自然科学および文化史跡調査報告書』

富山新聞社　1976『富山県大百科事典』

西井　龍儀　1979「先土器時代(1)」『富山市考古資料館報』No.1

西井　龍儀　1983「富山県の先土器時代研究の現状と諸問題」『北陸の考古学』

西井　龍儀　1985「砺波平野進出の足跡」『砺波散村地域研究所研究紀要』第2号

西井　龍儀・藤田富士夫　1976「呉羽山丘陵周辺の先土器・縄文時代草創期の遺跡について」『大境』第6号

藤田富士夫・山本　修　1973『富山市杉谷(67.81.64番)遺跡』富山市教育委員会

藤田富士夫　1974『富山市境野新遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会

藤田富士夫　1975『富山市杉谷(A・G・H)遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会

藤田富士夫　1981「富山県における群集墳期の古墳文化」『富山史壇』第76号

藤田富士夫　1984『呉羽山丘陵古墳分布調査報告書』富山市教育委員会

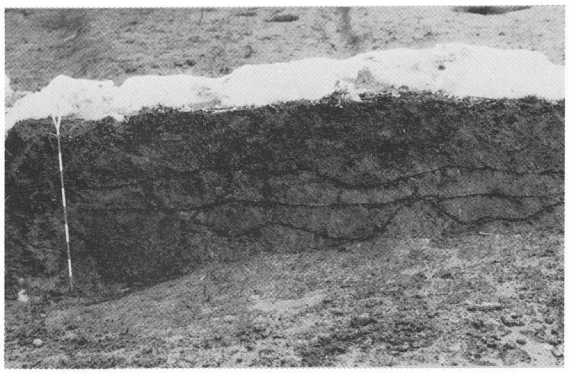
舟崎　久雄　1974「富山県における須恵器の編年」『富山県埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』富山県教育委員会

古川　知明・広岡　公夫・谷　祐史・酒井英男　1985
『富山市野下遺跡発掘調査概要』富山市教育委員会

吉岡　康暢　1967『加賀三浦遺跡の研究』石川考古学研究会

調査区全景(南から)

遺構集中地点(北西から)

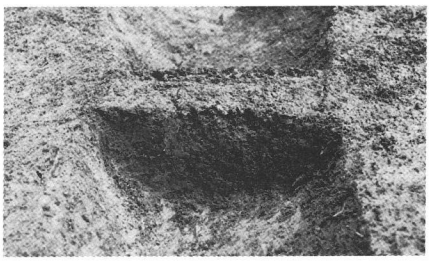


土層（ヌ―25区）

調査風景

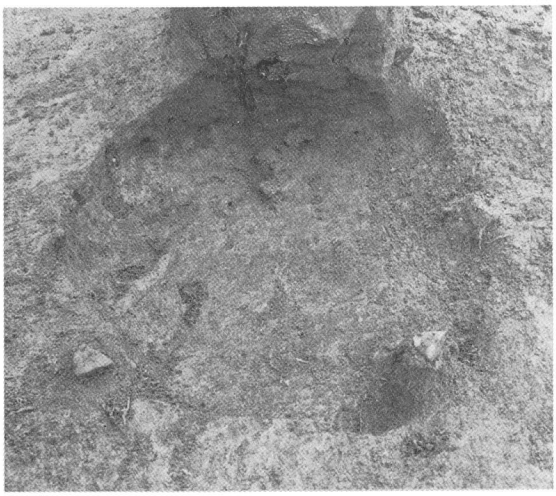
試掘調査時のトレンチ

溝１、２（南西から）



溝２　セクション

溝２　須恵器検出状況

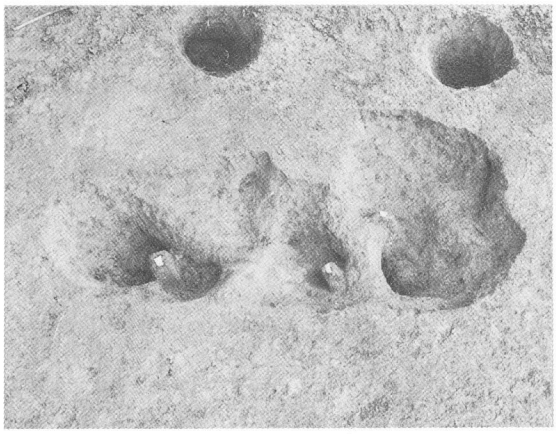


焼壁ピット(穴—Ⅰ)検出状況

P—Ⅰ須恵器出土状況

焼壁ピット壁面

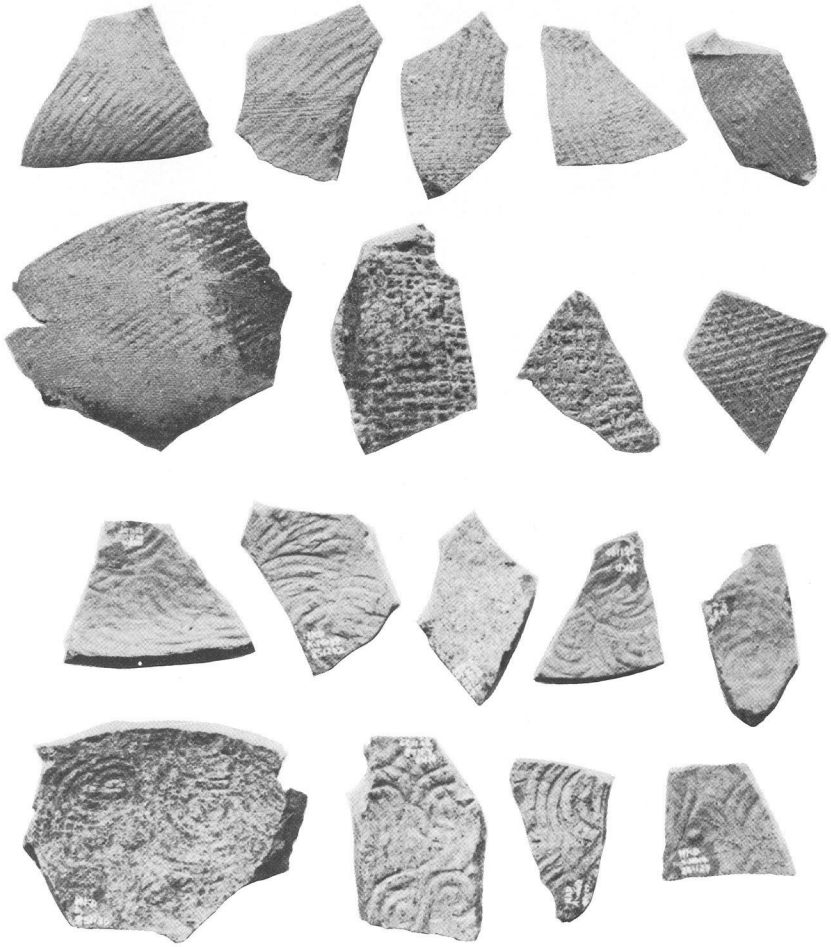
P—5須恵器出土状況



P—3、4須恵器出土状況

P—6須恵器出土状況

須恵器(杯、蓋、壺ほか)



須恵器　(甕)上・表、下・裏

開ヶ丘狐谷遺跡出土須恵器の蛍光X線分析

奈良教育大学教授　三 辻 利 一

開ヶ丘狐谷遺跡(A)(B)(C)をはじめ、畑総No.29遺跡（窯跡？）周辺のいくつかの遺跡出土須恵器の蛍光X線分析の結果について報告する。

資料は表面を研磨したのち100～200メッシュ程度に粉砕した。粉末試料は約15トンの圧力を加えて固め、直径2cmのコイン状の錠剤にしてX線を照射した。定量分析には岩石標準試料JG－1を標準試料として使用した。分析値はJG－1による標準化値で表示した。

全資料の分析値を表1に示す。K、Ca、Fe因子には有意な差は認められなかったので、従来からよく使用されてきたRb－Sr分布図上でデータ解析を行った。

8世紀に入ると、全国各地で須恵器生産が進む。したがって、窯の数が増加するため、無条件に元素分析だけで遺跡出土須恵器の産地推定を行うのは難しい。ここでは近距離の窯を優先的に産地であるとする原則にしたがって産地推定を試みた。この原則は近くで須恵器が生産されるのなら何も遠方から運び込む必要はないという常識に立脚するものである。

図1には畑総遺跡出土須恵器のRb－Sr分布図を示す。No.29遺跡は窯跡と考えられるので、No.29遺跡出土須恵器をすべて包含するようにして畑総領域をとった。そして、No.23遺跡、No.202遺跡の須恵器と比較した。No.23遺跡の須恵器は1点を除いてすべて畑総領域内に分布しており、No.29窯産とみられる。畑総領域をずれた1点の須恵器の産地は不明である。No.202遺跡の4点の須恵器は4点ともよくそろって分布しており、同一産地のものとみられるが、畑総領域からは少しずれる。しかし、同じ富山市内の山本窯領域内に分布しており、これらも地元産の須恵器とみられる。

図2には、開ヶ丘狐谷遺跡のRb－Sr分布図を示す。A地点の1点、B地点の3点、C地点の4点は畑総領域に入っており、畑総窯産と推定される。しかし、A地点の3点、B地点の1点、C地点の3点は畑総領域をずれ、畑総窯産ではないことを示す。これらの産地は不明であるが、すべて同じような位置に分布するところから、同一窯産である可能性をもつ。

図3には、北押川B遺跡、墓ノ段遺跡、御坊山遺跡出土須恵器のRb－Sr分布図を示す。これらは墓ノ段遺跡の1点の須恵器を除いて他はすべて畑総領域、山本窯領域に分布し、地元富山市内産とみられる。ずれた1点の須恵器は図2の畑総領域をずれた須恵器と同じ位置に分布し、同じ産地のものと推定される。これらを仮にIII群としよう。そうすると、今回分析した須恵器は畑総領域に分布するもの(I群)と、山本窯領域に分布するもの(II群)と、これからずれるIII群に分類できたことになる。I・II群は地元産の須恵器であり、III群の須恵器の産地は目下のところ不

明である。

8世紀代の地方窯周辺の遺跡には、予想されたように地元産の須恵器の分布が優位であることが示された。

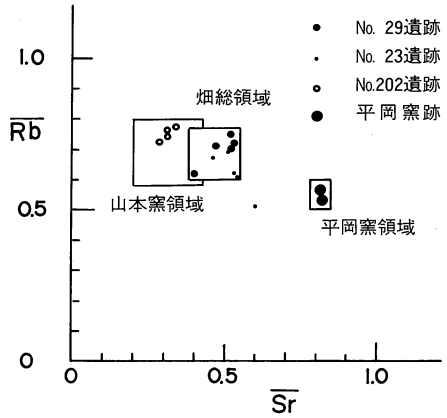


図1　畑総遺跡出土須恵器のRb—Sr分布図

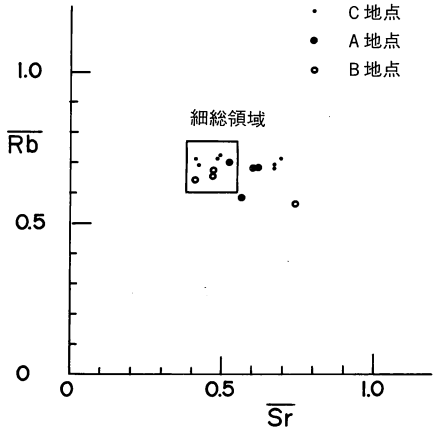


図2　開ヶ丘狐谷遺跡出土須恵器のRb—Sr分布図

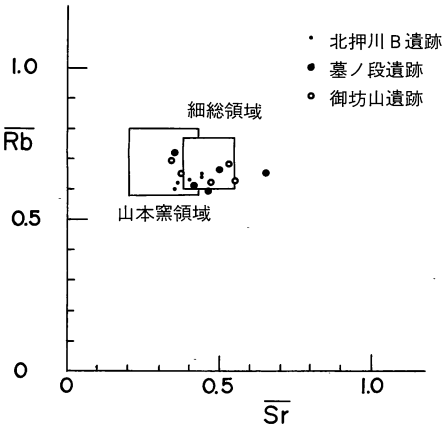


図3　北押川遺跡、墓ノ段遺跡、御坊山遺跡出土須恵器のRb—Sr分布図

遺跡名	K	Ca	Fe	Rb	Sr
開ヶ丘狐谷遺跡 A地点	0.739	0.193	1.33	0.684	0.596
	0.713	0.199	1.32	0.676	0.606
	0.666	0.159	1.33	0.584	0.560
	0.748	0.179	1.69	0.699	0.519
開ヶ丘狐谷遺跡 B地点	0.756	0.147	1.88	0.668	0.473
	0.542	0.154	1.89	0.639	0.411
	0.627	0.126	1.34	0.652	0.470
	0.667	0.183	1.29	0.560	0.737
開ヶ丘狐谷遺跡 C地点	0.685	0.106	1.24	0.705	0.483
	0.703	0.235	1.35	0.710	0.690
	0.676	0.233	1.36	0.680	0.670
	0.739	0.089	1.45	0.705	0.407
	0.690	0.129	1.61	0.723	0.486
	0.685	0.096	1.46	0.692	0.419
	0.642	0.193	1.38	0.685	0.666
畑総No.23遺跡	0.581	0.141	1.75	0.667	0.457
	0.615	0.175	1.57	0.511	0.601
	0.704	0.142	1.85	0.692	0.506
	0.624	0.119	1.59	0.623	0.529
	0.624	0.158	1.87	0.606	0.538
畑総No.29遺跡	0.639	0.082	1.92	0.619	0.404
	0.645	0.117	1.52	0.702	0.517
	0.717	0.132	1.55	0.754	0.523
	0.675	0.152	1.78	0.711	0.466
	0.730	0.128	1.56	0.720	0.532
畑総No.202遺跡	0.728	0.050	2.65	0.722	0.284
	0.743	0.044	1.78	0.762	0.307
	0.809	0.060	2.60	0.767	0.343
	0.739	0.065	2.32	0.743	0.310
平岡窯跡	0.712	0.257	1.63	0.562	0.811
	0.692	0.233	1.63	0.532	0.817
	0.618	0.143	1.50	0.564	0.539
北押川B遺跡	0.586	0.090	1.53	0.599	0.351
	0.561	0.125	1.47	0.632	0.396
	0.529	0.110	2.00	0.621	0.364
	0.612	0.130	1.51	0.646	0.436
	0.679	0.152	1.77	0.642	0.436
墓ノ段遺跡	0.601	0.151	1.52	0.607	0.410
	0.736	0.155	1.66	0.661	0.496
	0.646	0.086	1.57	0.715	0.354
	0.661	0.130	1.89	0.592	0.460
	0.745	0.218	1.39	0.648	0.652
御坊山遺跡	0.685	0.085	1.68	0.689	0.340
	0.738	0.156	1.20	0.677	0.533
	0.694	0.132	1.32	0.622	0.472
	0.704	0.165	1.21	0.625	0.550
	0.655	0.092	1.70	0.647	0.373

表1　富山市内の2.3の遺跡出土須恵器の分析値（分析値は岩石標準試料JG—1による標準化値で示されている）

（注）蛍光X線分析に用いた開ヶ丘狐谷遺跡出土須恵器の採集位置は、
A地点　遺跡中央部
B地点　遺跡西端部
C地点　遺跡北端部（A地区）

発　行
富山市教育委員会
富山市新桜町７－18

発　行　日
昭和61年３月

印　刷　所
中村印刷工業株式会社
富山市東町２丁目３番22号